



婦人の子と母



第三卷第四號



# 謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歓迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。

一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。

一、原稿は、一切返附せざることを。

一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。

一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。

一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

發行 毎月一回五日發行○第一卷第一號明治卅四年一月二十日發行

定價 一册金拾錢○六册前金九拾七錢○拾貳册前金壹圓拾錢○郵稅各一册一錢○切手代用は壹割増但壹錢切手に限る。

入會者 は會則御承知の上にて東京女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會にて申し込まれるれば雜誌は無代價にて送呈すべし

購讀者 凡て總べて前金にて東京日本橋區本石町三丁目二十三番地金昌堂へ御注文のこと○送金は神田今川橋又は日本橋室町郵便取扱所受取入金昌堂あてのこと○見本は切手・壹錢に限る十二枚封入にて申し越されたし○前金相切れ候節は亦にて御姓名の上にて附し早送御送附下されたく御入用なき時は御斷り下されたく候○轉居の節は新舊共に御通知を乞ふ

編輯 關於御照會及原稿御寄贈はすべてフレーベル會あてのこと

廣告料 一頁拾圓。半頁五圓

明治三十六年四月二日印刷  
同 年四月五日發行

發行所 東京市本郷區元町二丁目六十六番地  
編輯者 東京市江崎町一丁目十九番地  
印刷者 東京市神田區錦町一丁目二十五番地  
印刷所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地  
發行所 女子高等師範學校附屬幼稚園内  
發行所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地  
發售所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

不許複製

大賣捌所 東京市東京堂●同東海信文合資會社●同北隆館

婦人と子ども 第參卷第四號目次

子ども

伊伴物語(やまとの翁) ● 伊蘇普物語(牧羊譯) ● 不思議の裁判 ● 兎と龜と ● 人の年を早くあてゝる法 ● 簡易英語

家庭

生兵法

居眠りも無理ならず

家庭閑話

素人料理

富士ちやんの日記

學術

子供の觀念に關する研究

史傳

江馬細香女史の詩

黒澤登巖子

文苑

落椿

君の御蔭..... 鷲水

病める友を思ひて..... 東くめ子

友のつとひ..... つねを

花の袂..... 同人

歐米の家庭教育及幼稚園保育視察談..... 下田次郎

雜錄

うつき..... せく生

博覽會..... やて

道すがら..... 和歌子

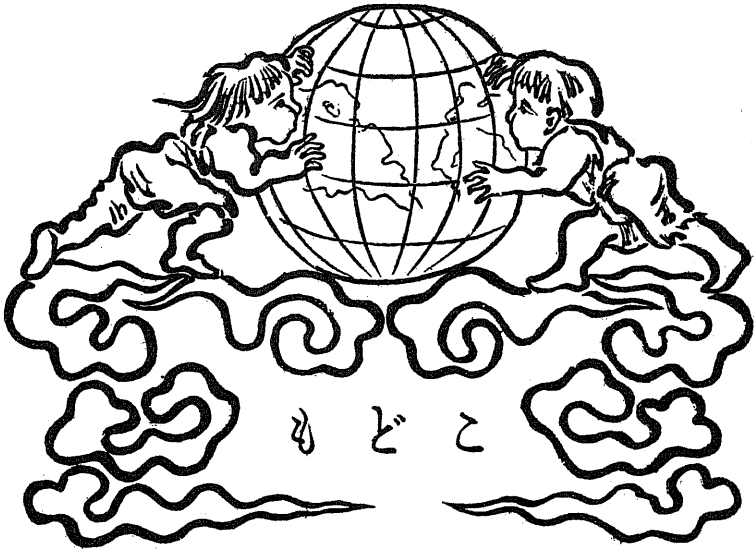
静岡紀行..... 牧羊

保育事項實施程度..... 女子高等師範學校附屬幼稚園

彙報

女子高等師範學校 ● 學習院初等科學生募集 ● 東京盲啞學校教員練習科 ● 芝高等女學校 ● 私立濟美學校 ● 女子寫真學校 ● 音樂演奏會 ● 教員檢定試驗 ● 府第一高等女學校談話會 ● 同盟母の會大會 ● 子を持つた人の注意 ● 信愛幼稚園の保育振 ● 大阪盲啞院救助部 ● 歌山高等女學校の服制 ● 山形幼稚園 ● 足利幼稚園 ● 野口幽香子 ● 奇聞一束 ● 松操學校 ● 新刊紹介 ● 會報

もど子と人婦  
號四第卷衆第



伊伴物語

やまとの翁

今度も も一つロシアの  
お話をしてみましょー！

まづある所に、伊伴とい

ふ一人の若者が居りました。

ある日のこと何かお金儲を

して来よーといふので、一

人で、家を出かけました。

さて、だんく出かけて行っ

て、とーく或不思議な國へ行つて、三年間九十圓といふ約束で、其處の大百姓に雇はれることになりました。それから正直に、一生懸命に働きましたから、三年目のお仕舞に、主人から十圓の金貨を九枚貰つて、喜び勇んで、其家を出かけました。所が、だんく歩いて來まして、一つの川の所まで來ると、伊伴は、ひよいと立ち留つて、ポケットから金貨を三枚出して、其川の中へ投げ込みまして、獨り言をいひます『若し僕が全く正直者だといふことなら、此金貨は、今に泳いで僕の手許へ戻つて來るのだ』これで、伊伴は自分の正直か、どーかを試す積りなんでせう。

そこで、伊伴は川の岸の所へ、寝轉んで待つて居ましたが、

其中に思はず、眠り込んでしまった。どの位長く寝入って居たかは、誰も知らない。併し暫らく立って目が醒めたから、急いで川へ居って見たが、悲しいかな、金貨の影も見えない。そこで、又ポケットから、残りの金貨の中で三枚取って川の中へ投げ込んで置いてまたく岸で眠って居て、暫らくして行って見たが、矢張金貨の形は見えませんが、仕方ないから、三度目には、お仕舞の三枚も投げ込んで仕舞って、さて行って見た所が、これは不思議！、金貨が九枚ながら、ちやーんと揃って、伊伴の方へと水の上を浮いて來ます。

そこで、伊伴は、『さし、これで僕は全くの正直物だ』といって大變に安心をして、其金貨九枚を　ポケットの中へ押し込



んで、氣も足も軽くなって、急いで行きました所が、道で、五人のロシア人が、荷馬車に一杯荷を積んで来るのに出遭ひましたから、『其荷は何だ』といつてきゝますと、『香だ』と答へました。夫で、伊伴は、ポケットから、前の金貨を取り出して、すぐに其香を買ひ取つて、ロシア人どもと別れました。そこで、火を焚いて、其香を焼いて見た所が、驚くべし、何處でもなく奇麗なく、音楽が聞こへて、一人の夫は、美しい羽の生へた天女が天降つて来て、ほがらかな聲で、伊伴に申しますには、『伊伴や伊伴や、汝は只今、希代な名香を焼いて神様を祭つたから、其志に愛でよ、神様は、汝の好きな者を何でも下さるとの事、汝の好むものは、王國なるか、世界の富か、夫とも美し



い姫であるか、遠慮なく、申し述べよ』

伊伴は、之を聞きまして、暫くは難有涙に咽びました、やがて其天女に申しますには、『夫はく有りがたいお言葉、併し私一人では、どれが一番宜しーか、さっぱり分りませぬから、暫くの間お待ちくださいませ、向うで畑をしてる人の所へ行って、一寸尋ねて見ますから』といって、ちよーど其時に畑で鋤を使つて居る人が居りましたから、いきなり其側に走って行って聞きました『伯父さん、伯父さん 神様に何を貰へば一番いーのだらう、王國でしよーか、世界の富でしよーか、夫ともいーお姫様でしよーか』といった所が、其百姓の申しますには、『私はそんな事は知らない、誰だつて人の事を知ってるもんかね、他

でおきよなさい』こゝいはれたから、仕方なしに、伊伴は又其次の百姓の所へ行つて、同じ事を聞きますと、又同じ様にいはれました。夫からして、三番目の人の處へ行つて、聞きました所が、其人の申しますには、

『まゝお待ちなさいよ、王國を貰うには、お前さんはまだ年が若すぎるし、お金を貰つても、すぐに失くなるし、だから一番いいのはいゝお女房さんを貰うこつた、すれば一生お前さんは仕合はせに暮らせるから』

そゝ聞いて、伊伴は早速、天女の所へ駆け戻つて、其通りに願つて置いて、さて道を急いで行きました所が、大きな木の下に綺麗な池がありました。『アー綺麗』だと思つて見ると、其木

の枝から鳩が三羽飛んで来て、三羽とも、同じ様に羽を脱いで、  
 其池の中へ這入って行きました。伊伴は夫を見て、はて妙だな  
 と思つて居ますと、鳩だと思つたのは間違で、眞實は三人とも奇  
 麗なく、お姫様であつたのです。さて三人のお姫様がやつと水  
 を浴びてしまつて、さて池から上らうとした時に、一番年下の  
 お姫様の衣服が、スーっと水に流されて仕舞つて居たので、其  
 お姫様は大變にお歎きになつて居ましたから、伊伴はお氣の毒  
 に思つて、すぐ泳いで行つて取つて来て上げました所が、お姫  
 様は、大層伊伴の親切をお喜びになつて、其お禮にといふので  
 としく、伊伴のお嫁さんになりました。

夫から、二人連れ立つて、一番近い村まで來まして、先づ家

を建てよーといふことになつて、伊伴が山から、木を伐つて來ました所が、お姫さまが、すぐ夫で家を立て、仕舞ひました。すると、其の村に居た殿様に一人の悪い家來が居りましたが、此お姫様を見て、殿様に申しました『どーも、伊伴の所のお姫様は、大したもの、美しいことは、此上なしたし、夫に利口で、器用で、實に珍らしいお嫁さんだからあのお姫様を、取つて來よーでありませんか』と、大變に悪い事を勧めました。そこで、どーして取つて來よーかと、だんく考んがへた末、其家來が申します。『何でも六ヶしい問を出して、若し伊伴が夫に答へることが出來んければ、お姫様をこちへ遣せといひつけましょー』といった所が、殿様も『なるほど』といつて、とーく

伊伴を呼びよせました。其問題といふのは、次の様なのです。

『お日さんが、西に沈む時に、眞赤に見えるのは何故か』

伊伴は何事かと思つて、殿様の所へ行くと、其事でしたからさし、大變に弱り込んで、涙を流して家へ戻つて來ました。すると、お姫様は、其譯を聞いて、『ア其問ですか、一體妾は、もとはお日様の娘なんだから、お日様の事なら何でも知つて居ます。ですから、其答は妾がして上げましょ。是はこゝいふ譯なんです。丁度お日様が、西の海へ沈む時には、三人のお姫様が、お日様から出てくるので、眞赤になつて見えるのは、つまり其お姫様のお姿なんです。さし、早く殿様の所へ行つてそゝ仰いな』

夫で、伊伴は、やっと安心して、すぐ殿様の所へ行つて、其譯を申しました。すると、殿様の方は伊伴の物知りなのに皆吃驚しましたが、夫丈けでお仕舞にはしません。又悪い家來の申しますには『オ、夫が分る位なら、餘程豪ひ、今度は一つ地獄へ行つて、地獄の様子を見届て來るのだ、是が出来たら、許してやらう』そこで、伊伴が歸つて、お姫様に相談しますと、お姫様は、『地獄へ行く道は、妾が教へて上げるが、併しお前さん、一人で行つて來て殿様に申し上げた所が、誰か證據人でもなければ、眞實にしないでしょーから、他に一人連れて行かねばなりません』と申しましたので、伊伴は殿様に申し上げて、とーくあの悪い家來と一所に行く事になりました。

そこで、伊伴と殿様の家來と、二人連れ立って、だんく急いで行って、やっと地獄の門の所へ着くといふと、其處には閻魔王が疾くから待って居て、二人の來るのを見るや否や、不意、其家來を取つ捕まへて「コラ犬め、余っ程前から、貴様の來るのをこゝで待って居たのだ、今に其方の主人も呼んでやるぞ」と大聲で、怒鳴りながら、とうく門の奥の方へ、引っ張り込んで行きました。

伊伴は、之を見て、吃驚仰天、其儘一人で飛んで歸って殿様の所へ行きますと、殿様は、「家來はどうした」と聞きましたので伊伴は前程のことを話して、殿様も、今に呼ぶんだと云って居たといふことを申しました所が、殿様は夫を聞いて、大變に

恐ろしがつて、今迄悪かつた事を すっかり後悔して、夫から  
後は、伊伴夫婦を大變親切にしてやりましたので、伊伴は何時  
までも、お姫様と一所に仕合せに暮しました とさ。

めでたしく。





伊蘇普物語

牧羊譯

其十一 蟻と鈴虫

ある冬のお晝頃、丁度天氣がよくって暖な時、大勢の蟻がよってたかつて、夏中貯へて置いた食物を穴から出して来て干して居ますと、一匹の鈴虫が、饑饉で以て、お腹をペコ〜にしてやっ来てまして、どーか少し食物を頂戴といつて、蟻に願ひました。すると蟻どもが鈴虫に尋ねます「何故お前夏の中に食物を貯へなかつたの」鈴「だってそんな暇がなかつただもの」蟻「じゃー何して居た」鈴「僕は毎日歌を歌って居たからなわ」そこで蟻どもは一度にとつと笑ひ出しました。「ハッハ、ハ、ハ、ハ、夏中丸で歌って暮らした程の馬鹿なら、冬になつたら、飯も食べないでお床の中で跳つて居るのが普通よ」

其十二 兎と龜

ある時兎が龜に行き遭つて「まあ、何といふ短い足だらう、そして歩き方ののろい事といつたら、どうだ」といって冷かしました。すると龜は、ニコ〜と笑ひながら「そりゃ、君が風のように速いかも知れないが、駆けくらになつたら、僕も負けやしないよ」兎は夫を聞いて、馬鹿な、そんな事が龜さんに出来るものかと思つたから、すぐと駆けくらをして見ることに決めました。そこで二人は、狐を呼んで来て評定官になつて貰つて、向うの松の木を目標にして、一二三で駆け出しました。所が龜の方は一生懸命になつて、のろいけれども、決して休まないで真直に目標目がけて走り出しました。兎はもと〜駆けけるの、速いのが得手なもんだからなわに、龜なんかには負けるもんかと思つて仕舞つて

一向に氣を附けない、とうとう道側で腰を据へて眠り込んで仕舞つたのです。暫くして、目を醒まして『オヤ』と思つてさう夫から驅け出したく一生懸命に飛んで行つて、目標の所へ行つて見た所が、も一とつくの昔しに龜が來て仕舞つて居つて、『ア、疲れた』といつて休んで居た所でしたと云ふ。

其十三 炭焼と布澤し人

炭焼が自分の家で、毎日〳〵家業をして居ました。が、或日のこと途中で、布澤し人に出遭つて『どーだ、僕の所へ來て一所に、商賣をしたら。第一、一軒の家を二人で持つのなら、餘程經濟になるぜ』と申しました。すると、布澤らし人は『折角だ。がまゝ廢さうよ、二人で一所の内ぢや、とても商賣が六ヶしいから、なぜかといつてごらん、僕が眞白に布を澤らすとすると、君はすぐ、炭で以て又

眞黒くしてしまふからな』

牛は牛連といふことがあります。

其十四 漁夫の音楽

大變な音楽好きの漁夫が居まして、ある時、笛と網とを持って魚取りに行きました。先づ海の濱から突き出した岩の上の上つて、網を足の下に擴げて置いて、しきりと笛を吹き出しました。屹度魚どもが、此笛の面白さに浮れて、獨り手に網の中へ跳り込ひだらうと考へたのです。所がどの位吹いても、中々魚が跳り込んで來さうにもない。とうとう待ち疲れて、笛を側に置いて網を海の中へ投げて見た所が、さう取たれとも取れたとも一度にとつさり網にかゝつた。岩の上の上に引き上げて見た所が、魚はピン〳〵網の中で跳て居る、そこで漁夫の曰くさ『全體貴様たちは、間違つて居るではな

いか、折角己が笛を吹いてやった時には跳らないで居て、己めてから面白さうに跳るてへのは随分馬鹿な話だなー」

### 不思議の裁判

むかし〜ギリシアといふ國に、ひとりの學生が居りましたが、法律を研究する目的で、或る法律の先生の門には入って、「御禮は何れ卒業して始めて裁判に出て勝つた時に御渡し致します」といふことで三年の間勉強して、卒業しましたが、夫つ切り中々御禮のお金を持って來ません。

そこで、先生もとうとうこらへきれないで、月謝請求の裁判を起しました。裁判官は二人のいふことを篤と聞いて「それは、どうも學生の方が宜しくない。三年の間習つた御禮は確に、先生に拂はん

ければいけない」といって、とうとう學生の負けになりました。

それで、先生は「さー裁判でも己が勝つたから、どうしても月謝を拂はんければいけない」と學生に申しますと、學生は、済したもので、「イーエ夫でも始めの約束は、私が始めて裁判に出て勝つた時にお拂ひするといふことでした、今度の裁判では私が負けたのですから、決して拂ふ義務がありませんといつて、中々拂ふとはしません、夫で裁判官も大に困つて、と〜此裁判は無期延期にしましたとさ。

### 兎と龜と

これも、昔しギリシア人の考へ出した事ですが、龜と兎と競走させるに、龜が兎よりどの位か前の

所に居て、同時に二人で走り出した時は、何時まで経ても、兎は龜を追い越すことができないといふ議論なのです。まづ假令ば、かりに今龜が一尺走る間に、兎が十尺走る速度を持つて居るとして、龜が兎より千尺前の處に居て、夫から同時に走り出すとする。さう、そこで、龜が急いで前へ百尺走って行くと、兎は後から來て其十倍を走つて來るから、丁度千尺を走つて來て前に鼠の居つた所まで來る。其次に龜が十尺走る間に、兎は又其十倍即百尺を走つて來て、二度目に龜の居た所まで來る。次に龜が一尺進むと、兎は又其十倍即十尺を走つて來て、三度目に龜の居た所まで來る、次に龜が一寸走り出すと兎は又其十倍即一寸走つて來て、四度目に龜の居た所へ着く、今度龜が奮發して、一分走るといふと、兎は其十倍即一寸を走つて、

五度目に龜の居た所へ着く、次に龜が一厘走ると兎は其十倍一分を走つて六度目に龜の居た所へ着くといふ風になつて、いつでも、兎は龜よりも十分の一丈の距離と後れて行くから、何時まで経つても追つ付く事が出來ないのですといふ。

人の年を早く當てる法

先づ次の様な數字の表を憶らへる

(一)	1	3	5	7	9	11	13	15	17	19	21	23	25	27	29	31
(二)	2	3	6	7	10	11	14	15	18	19	22	23	26	27	30	31
(三)	4	5	6	7	12	13	14	15	20	21	22	23	28	29	30	31
(四)	8	9	10	11	12	13	14	15	24	25	26	27	28	29	30	31
(五)	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31

そこで、對手に自分の年齢が、此表の中のどの行と、どの行とに在るといふはせるのである。假令ば

對手が若し、第二行に在るとしたら 其年は二歳  
 である。第一行と第三行とに在るとい たら五歳  
 である。若し第一行と第二行と第四行とに在ると  
 したら其年は十一歳である、これはつまり其言  
 った行の一番上の数字丈けを加へて行けば、其年の  
 數が得られるのである。即一行と二行と四行とに  
 在ると5へば1と2とを加へて11を得られる  
 のである、但し此表は三十一までの年に限るの  
 である。

簡易英語

- 1) bird 鳥 See the bird. 鳥をみる。
- 2) horse 馬 See the horse. 馬をみる。
- 3) rat 鼠 See the rat. 鼠をみる。
- 4) ox 牡牛 See the ox. 牡牛をみる。

- 1) the bird flies. 鳥が飛びます。
- 2) the horse runs. 馬が走ります。
- 3) the rat runs. 鼠が走ります。
- 4) the ox runs. 牡牛が走ります。



## 家庭



## 生兵法

生兵法は大疵のもと、は、昔より世間にいひ傳へ  
 疵る諺でござりますれば、皆様はこの意味は百も  
 ご承知でござりませう。さるに、鎗や薙力を使ひ  
 又は弓矢鐵砲を持ちて、戦を學ぶのではなく、愛  
 情熱心を以て、無垢無邪氣の子どもを教つ育つる  
 上にも、時にこの諺にもれぬやうの事のあるのは  
 誠に歎かほしい次第でござります。かく申しませ  
 るのは、學者や教育家は教育上の兵法の心得あ

れば、他に比べますれば、教育方宜しきを得て、  
 其子どもは十全の發達を遂ぐべき筈なるに、却て  
 感高いとか虚弱者とか、とかく發達圓滿ならざ  
 るものがあるからでござります。中には勿論天性  
 しかあるべき子どもあり、又他にもぬけて立派な  
 る子どももござりますことは事實でござりますけ  
 れども、また其中には、随分劣つた子どものある  
 ことも事實の様に思はれます。これは、大疵を父  
 母が自ら受けないうで、反つて子どもに負はしめ  
 るものと申して宜しからうと存します。そして、  
 この過を來すはもとく、子どもの發達如何を熟知  
 せず、一圖に子供不相應の刺激を興へ、夫が爲に  
 甚しく子供を疲れしむるに因ること、思はれます  
 全体子供の視聽さする感覺は皆一様に發達しない  
 といふことは、皆様も御承知の通りであつて、耳

目の發育の度に應じて視聽の力か出來て來まして  
其他總ての力も決して皆同様に發達致しませぬ。

高尚なる心の働さも、これと同然の譯合になつて  
居ます。然るに教育上に於ては實際この事柄が多  
く世間に見のがされて居るではありませんか。そ  
れで物事を見たり聞いたり又真似る力はありまし  
ても、まだ道理を辨別判斷するなどの力のない子  
どもに向つて、無闇と理窟をならべ立て、教育  
しようとした所が、到底其効のない許りではなく  
時によりては却て子供に大疵を負はしむるやうの  
ことに立ち到るのであります。學者教育家が却て  
この過を招くのは返すくも残念の次第にごさい  
ますれば、皆様も深く教育の方法をお調への上實  
際にご留意はよく、御注意ありたきことと存じ  
ます。

居眠りも無理ならず

霓

園

「小僧また眠つて居る」とは、店番の小僧へ番頭  
さんのお叱言。「お前はなぜそんなであらう、夜分  
ばかりでなく朝からの居眠りは何事です」とは子  
守女に奥さんのお小言。小僧子守の居眠りも時に  
は無理ならざるやうに考へますれば、普通子ども  
の要する睡眠時間を左に掲げて、御参考に供する  
のは、あながち朝から晩まで立動く小僧子守の辨  
護ばかりでなく、お家の爲め御店の爲でございま  
す。

年齢

時間數

生れてより四週間に至る 二十乃至二十二時間  
一ヶ月より六ヶ月に至る 十六乃至十八時間  
六ヶ年より一年に至る 十四乃至十六時間

一年より二年に至る 十二乃至十四時間

二年より六年に至る 十二時間

六年より十年に至る 十一時間

十年より十五年に至る 九乃至十時間

## 家庭閑話

### その子

▲淺ましかりしは、或年の暮、さる高き女學校の教師の許音つれしに、玄關前に餘念もなく遊び居たりし其家の男の子の、我が入り來りしを見て「オヤ變な野郎が來やがったよ」と立ち上りさま、叫び出したるにぞ、胸潰るゝ心地して、思はず挨拶も勿くして歸り來りぬとさる夫人の語られし。

▲親しき友の許訪ひけるに、折ふし留主との事にさらばとて他の用を濟ませての歸るさ、もはや歸

り來ませるにやと、又た尋ね見たるに、同じく其家の男の子の五つ四つとも見えしが、つと走り出て「また來やがったよ、此畜生」淺ましとも淺ましくて、主人のまだ歸りませずと聞けるを好機に、我は得も知らぬ感情を抱いて歸り來りしこともありき。

▲嗚呼、無心の幼兒―無心の幼兒のすることと言ふこと、一々そが爲めに心を動かすとははあらねど曇りなきこの幼兒の心の鏡に映れる家庭の面影のはしなくも、其口より其行よりはの見ゆるぞと思へばこそ。

▲「どーも、これが悪戯者で、手におへませぬで困ります」とは、幼兒を連れたるおつ母さんの口より常々聞く所なれど、而いふおつ母さんの心と口とは、いみじき裏表のあることにて、心の中では、



手に負へぬほど困らぬものと知るべし。

▲悪戯にも依る事なれど、泥こね、水いぢり、虫追ひなどに歸るを忘れ、飯事羽子つきに日の暮るゝも知らずうち過ごし或は紙片を切り散らしては下婢の掃除に困らせるなどは、何れも子供に相當なる活動なれば、丈夫な子の特徴として喜びこそすれ咎め立てすべき悪戯にはあらず、終日何の爲す事もなくて、たい無言の儘、柔順く座り居る幼児ならんには、夫こそ母親に取りては生長の後、尋常ならぬ困り物なりと知べきなれ。

▲冷水摩擦が健康によければとて、生れて一年も經つや經たぬ中より始むるは事理に通ぜぬ非常なり、皮膚に反抗力の出で來るは少くとも五六年の後なれば、幼児の冷水摩擦も此頃より始むべしと或小兒科醫は語られぬ。

▲嫁と姑との、氣の合はぬとに付き、大方の人は、現今過渡の時代新舊思想の不調和といふことに其原因を歸せんとする様なれど、それは極めて皮想の見解にして、女の四十五十といふ齡は、確に一種の大なる生理的變動の來るものなれば、二者の不調和は専ら之が原因をなすものなりと説かれたる知名の文學者あり、果してさるものによ、もとより、たい新舊思想の衝突ばかりとは思はれぬ。

▲返事を貰ふべき手紙を出す時は、必ず返信用の切手を封入することを忘るべからず、極めて親しき友達には例外として。

▲同じく自分の腹を痛めし子供を育つるに、何れ可愛さに差別のあるべしやと思はるゝに、さても人情はさまざま、姉を愛して妹をさほどに思はぬ

もあり、弟を可愛かりて兄をさまでに思はぬ母も  
ありとか、此上なき非事といふべし。

▲妻もたぬ男は妻に對する愛情を知らず、子持たぬ親は子の愛を知らず、兄弟なき子供は友愛の如何を知らず、何れも家族的感情の圓滿なる育成には缺けたる節ありとやいはん。

## 素人料理

●馬鈴薯の乳煮 馬鈴薯の皮をむき、二つに切り水へ浸してあくをぬき、鍋に入れ水をさしてゆで箸の通る位になりし時湯をこぼし、牛乳をいもの上こすほど充分に入れ、白砂糖と食鹽を好みに應じて加へ文火にてゆるく煮るべし。

●玉菜の鶏卵とし 玉菜の新しきを擇び外の葉を二三枚とりすて、中のやわらかき葉を、一枚つゝ

はがしざつとゆで、一寸水の中に浸し置き、鍋にかつをのたし汁のほどよく味つけたるを煮たせ

この中へ右の菜を入れ、暫くして鶏卵を割りよくかきまぜて、菜の上にひらなくかけて煮るなり。

●焼玉子 鶏卵六個に牛乳一合と鹽少し加へ、

メリケン粉六七匁を水にときて加へ、牛肉或は鶏肉を柔らかに煮て細かにきざみたるを交せ、焼鍋に油をしきて、焼くべし。

●豚切煮 豚の上肉を五分程に切り、バターを鍋にしき、割葱と一つに入れ、葱の煮けて色の變りたる時、鹽を入れ又メリケン粉をときて入れ、再び文火にて煮るべし。

●比目魚油煮 ひらめを鹽に漬け、一日程經て其鹽を洗ひ落し、パン粉に鶏卵をとき合せ、豚の油にて揚げ、ソースをかけて出すべし。

●むし蕪 五つばかりの蕪をさい形に切り、バタ二斤ほどと、メリケン粉を少し加へ、鍋に入れてむすなり、胡椒の粉をふりかけて食す

●葱の富士あへ ねぎの白根ばかりを一寸程にきりてゆで 白胡椒をすり白味噌に酢を加へ白味噌を入れ、すりませてあへるなり。

富士ちゃんの記事

(明治三十四年十一月生)

會員 某 女

明治三十五年八月十七日 親類の家に連れ行きたるに、其處の子供の玩具を取らんとし、又一方は貸すまじとして、互に争ひ、終には共に泣き出した

八月十八日 今日叔父ちゃんが、學校への出掛け

に、「サヨナラアイ」といひて、口を大きく開きたるが、この後は誰にても、「サヨナラ」といへば、富士ちゃん必す「サヨナラアン」といひて、一杯に口をあけ、目を見張る、其様實にお笑し、

八月十九日 父ちゃんを「チエ、チエ、チャン」といひ始む。

八月二十日 風を引きて、氣持悪しき爲めか、ねむそうにして眠らず、機嫌わるく困りたれば、母ちゃんが背負うて、桃太郎や、浦島などの歌をうたひながら、椽を歩きまはりたるに、いつの間にか眠りたり。

八月二十一日 箆筒の銀の「チン」と音するを喜び自ら銀を上げ下げして、音する毎に「チン」といひて、餘念なく遊びたり。

八月二十二日 此頃は非常の悪戯にて、火鉢の側

に來れば、灰をかきまはし、障子、唐紙などの所に行きては、之を破り、少しも油断ならず。今日もあまり悪戯をして、終に、したたか額を打つた、富士ちゃんは「オデコ」だから、何時でも、一番先きに額を打つて、始終瘤の出來居るには、皆笑はずに居られない。

八月二十五日 今日にて丁度生後三百日なり。

八月三十一日 何時の間にか、食指にて、空や表の方を、指すことを覺え、何か言ひたそうになせり。

九月二日 親戚の人より、江島土産なりとて、貝に笛のつきたるを貰ひたるに、其音調子はづれに高き故か、是を聞くとすぐ泣き出した。

九月三日 母ちゃんが、女子の友を讀み居たるに其中にかもしるき子守歌ありたれば、是を歌ひ聞

かせたるに、心持よさそうに眠りたり。  
九月五日 買物を連れ行きたるに、途中より雨降り出し、顔にかゝりたれば、小踊りして喜べり。  
九月八日 新聞紙を破ぶることが大好きで、これさへなし居れば、暫らくは静に遊ぶ。





子供の觀念に關する研究

文學士 松本孝次郎

觀念は個々のものに付ての吾人の智識である。即ち吾人が經驗して自分の心に受取つた一々の姿でありまして、其姿は刺激物がなくなつた後も尙心に殘て居る。故に吾々の思想の材料となるものであつて、此觀念に由つて吾々の智識は成立つて居るのである。さて觀念は實物を知覺して得るものであるから、實物を知覺することが精密なれば精密なる程、觀念も亦精密になる。従て觀念は人に由て精密の度が異つて居るものであるが、そ

ればかりでなく、觀念の作り方が異つて居る。例へば同じ人を見て、男は重に其顔に付て知覺し女は其様子又は衣服に付て知覺することが多いから、同じ人に付ても、男の有て居る觀念と女の有て居る觀念とは其作り方が異つて居る様なものである、右の様であるから、實物を知覺する時に、自然のままに任せて置く時は人々皆各々自分の好むまゝに知覺して他に注意しない。従て完全な觀念を作ることが出来ない。

故に幼兒に實物を示す時には能く其注意すべき點を指し示してやるがよろしい。而して最初から實物の全体に注意させることはよろしくない。まづ一部に色、形、位置、といふ様に順次に注意させて、全体に及ぶ様にしなければならぬ。何故ならば、初から全体を見せるときは漠然として

確實なる知覺をすることが出來ぬ爲に、其觀念は極々ぼんやりしたものになるからである。凡て幼兒の有て居る觀念は實に漠然とした者であるが、それは幼兒の畫く繪を見て知ることが出来る。かの幼兒が畫く人、馬の如き繪も全体としては人、馬として見ることが出来るが、其一部分を取て見るときは容易に手又は足として想像することが出來ぬ。これ幼兒は人なり、馬なりに付て全体をばうと知て居て一部ノを確實に知覺して居らぬからである。故に一部分々に注意させる様にとめて、全体にわたつた精確な觀念を得る様に導かなければならぬ。幼兒をして個々に付ての精確な觀念を得させるには、彼是混同する恐れのない様に其差別の甚しいものを示すことが大切である。故に假字を教へる時なども相類似した字を同時に教

へるよりは、其形の著しく異つて居るものを教ふる方がよろしい。又觀念を作ることに付て世間の父兄、保母、教師などの通例あやまつて居るとは其觀念の數を多くせんとつとむるのである。觀念の數を多くせんと務むるときは、自然其個々の觀念は不精密となるものであるから、たとひ其數は少くとも精確であることを望まなければならぬ。此點から申せば妄りに多くの實物を知覺させることは得策でない、又話をするにも其話の中に多くの觀念の含まれて居るものはよろしくない玩具を與へるにも、繪畫を見せるにも同じであるかの上流社會の子弟が多くの觀念を有て居るが確實でないのは餘り多くのものを不精密に經驗するからである。而して又實物に對する智識がなくて觀念の名稱丈を知らせることは大に避けな

ればならぬことである。日本で普通幼児に與へて居る處の繪は一枚に多くの者を繪て居る。又其繪は極不精密である。故に幼稚な兒の爲にも、又幾分か進んで居る兒のためにもよくない。ことに稍進んで居る兒のためには部分々の特徴を分解的に畫いた者が必要である。即ち種々の方面から觀念を作ることの出来る様な繪でなければならぬ。凡て幼児に觀念を與へるのには最初自然物の觀念を與へるのがよろしい。一体幼兒は自然物に近寄る便利の多いもので、之を知覺させることは容易である。加之、自然物の觀念を與へることは必要であるから、まづこれを第一とし、次に文明の利器に付ての觀念を與へるべきである。而して一方では幼兒をして知覺した觀念を材料として實物を作らせることが必要である。

吾人は多くの觀念を有て居て常に之を思ひ出して居る。而して其觀念の思ひ出し方には一定の規則によるものと、さうでないのとありますが、其の一定の規則によるのは之を觀念連合といひ、然らずして思ひ出すのは自發的復起といひます。而して幼兒は自發的復起に由て觀念を思ひ出すことが多いもので、段々發達するに従て觀念連合が多くなる。而して、其連合の仕方又發達に伴つて異つて來るものでありますが、最初は接近連合であります。これには空間的接近連合と時間的接近連合との二つがある。空間的接近連合といふのは例へば曾て或る場所へいつて其所で遊んだことがあつたとすれば、其場所を見て直に其遊んだ事柄を思ひ出す様なもので、時間的接近連合といふのは某所に居つた時に雨が降つたとすれば、雨を見

て某所に行つた事を思ひ出す様なのである。而して以上述べた接近連合に次いで起るのは類似連合で、これは類似の點に由つて觀念を思ひ出すのである。友達の事を思ひ出すときに、これに似た人の事を思ひ出したり。上野の事を思ひ出す時に、飛鳥山の事を思ひ出すなどはこの類似連合である。幼児に問をかけて幼児は其問相當の答をすることの出来るのは類似連合をすることの出来るのであります。實に大人の思ひもよらぬ無關係な答をする間は、接近連合によつて觀念を思ひ出すのであります。

觀念の連合の仕方は小學校二年位迄の間は男女共左程差のないものである。しかし個々の人に付て見れば種々ある、かの悪い家庭、又は繼母に育てられた意地悪い子供は多く反對連合をするもの

で、寒いといへば暑いといひ、貧といへば富といひ、面白いといへば面白くないといふものが多い。又賢い、こざかしい、子供は連合の仕方が早く、遲鈍の子供は遅い。故に連合の仕方を以て幾分か其性質を知ることが出来る。而して觀念をさづくるに如何にせはよいかといふに、まづ最初にイ、ロ、ハ、ニ、の性質を備へたAに付ての觀念を投つけたとすれば、次にはハ、ニ、ホ、ヘ、の性質を備へて居るBに付ての觀念を授げるといふ風に段々連絡したものを授けるがよろしいのであります。



# 史傳



## 江馬細香女史の詩（其一）

小林雨峰

予昨夏美濃に遊び、岐阜、大垣を過ぎ、養老公園に入り、元正御宇の孝子を思ひ、一夜大垣に寓す、竊かに思ふ、大垣は曾つて江馬細香女史を出せしところと人に就て之を聞く、甚だ其の詳を得るに苦しみ、歸京、偶々「湘夢遺稿」を繙き、女史の詩才、巾幗者流中にありて、一大頭角を現はすものあるを察し、書架の雑筆を探りて、聊か女史の小傳をものして、是を諸姉に紹介するとなしぬ、

願ふに近世閩秀文士の名、世々漸く出で、小説に和歌に文事を談ずるもの日に月に多し、世運の進歩また舊日の比にあらず、然れども、かゝる閩秀作家のうちにありても、淫靡浮華なる文字を弄して、得意満面の色あるか、然らざれば悖倫敗徳の事績を臚列して、社會の真相を描きたりとなすの輩のみ、其の和歌を詠じて、風教を助け、文詞を以て一代を謠歌するが如きものに至りては寥々として見るべきなし、宜なり、ローラント夫人や、シユライネル夫人、エリオット夫人の如き閩秀文士の出づるなきを、吾人の細香女史の詩を紹介する所以、決して偶爾にあらざるなり、女史蓋し慷慨氣節を負うて、國事に奔走し、常に志士と交りて終生人に嫁せず、好んで墨竹を書きまた詩を善くす、吾人今其の遺稿を讀むにわたりて、

面影髣髴として窺ふに足るものあり

梁川星巖曾つて女史に贈るの詩に云ふ、

暈碧裁紅簇異葩。醉吟破費萬箋霞。座間別有靈

香迸。一朵西天稱意花。翻譯各義集須曼那、此云菩薩意、又云稱意花其色黃白、而

極香、須曼女生子曼花中。

瀟瀟風流賽仲姬。直竿放筆墨淋漓。莫教吾衍題

詩句。不免朱口倒好嬉。吾衍字子行、杭人、眇一目嘗作一小印、日好嬉子、仲姬書

傳至于行、爲題詩後、倒用此印、他日文敏見之、罵曰、簡瞎子、他道好嬉子耳。

この詩、梁翁、が實に、太古、士、錦、實甫等の諸士

と、柏淵、純甫、爽氣樓に集り、賦して一は女史に贈

り、一は實甫に示せしものなりと云ふ、以て文人

志士と交遊せしの状を見る可し、

案ずるに、嘉永、文久の際、海内騷擾を極めて

憂國の士、皆劍を按じて起ち、山陽、星巖の徒、

或は史に托し、或は文に寓し、或は詩に寄せ、以

て憂國の元氣を發揚す、女史實に此の際に生れて

久しく山陽に學び、また墨竹の技を玉澤利尚に學

び、長して諸方憂國の士と往來す、後藤機(山陽

の行状をも誌せし人)の撰せし墓誌によれば、

女史の諱は曼、湘夢と號す、細香は其の字なり

江馬氏、蘭齋翁の第二子なり、文久元年、辛酉

九月四日没す、享年七十五、禪桂寺に葬る、女史

人となり、篤實溫雅、卓識あり、父に事へて孝、

故ありて笄せず、筆硯自から娛む、又概然憂國の

氣あり、鬚眉丈夫をして、愧色あらしむ、嘗つて

京師吉田袖蘭女史と共に江を下る、余之を導て、

家岳篠崎翁を見る、既にして翁之を目送して曰く

眞女史なり、若し夫れ袖蘭は則ち凡而巳と、銘に

曰く、(墓誌は元漢文なりしも今讀むもの、爲めに

訓解せり)

書竹燭那。書山峻峭。女而不婦。此是小照。

と黒竹を愛するが如く、勁直の質、峻峭の氣、自  
から見るを得べし、江馬蘭齋と云へるは、大垣藩  
の醫にして、名は春琢仙子樓と號す、通稱は徳仲  
安政三年十月十一日歿し、子孫今大垣にありて、  
尙父の業を嗣げりと傳ふ、

女史の逸事には往々人口に膾炙せるものあり、  
曾つて、『日本』新聞に其の性行を記せしものあり  
しと覺ゆしが今記憶に存するものなし、たゞ左に  
録する一節の如きは聊か、今日の女學生など云ふ  
ものにとりては龜鑑とするに足るべきか、

『古今雅俗石亭書談』に云ふ、畫は竹河に學び、  
又梅逸に往來して畫名高かりしが、年若き頃より  
して、粉華を事とせず、綾羅を用ゐず、曾つて京  
師に上り、梅逸の家に宿す、其妻怪みて問て曰く

女史こゝに来る日未だ幾何ならず、然るに其結ぶ  
ところの帶、破れて裏を露はすは如何、細香答へ  
て曰く、褻帶は發途の際既に破れたり、然れども  
繕綴を加へず、直ちに京に上る、其破れたるは素  
來のみと、

其の裝飾の爲めに意を用ゐざる事、此くの如し  
次にこは、『日本』新聞にもかゝげありしと覺は  
たりしが、かの墓誌中にもあるが如く、女史は終  
生嫁せざりしと云へるににつき、書談は左の如き  
とを云へり、

頼山陽、曾つて、江馬の家に寓し、細香の才學  
あるを知りて聘せんと欲す、細香常に以爲らく、  
萬人に卓越せる者に非れば醜せずと、是時山陽の  
伎倆未だ著はれず、故に辭して應せず、後山陽の  
名世に顯はるゝに及びて細香耻ぢ且つ悔て、終身

他に嫁せず云云

山陽との關係よりして終生嫁せざりしの一事は頗ぶる議すべきものありと雖も、また平生の抱負を考察し、爲めに、後年山陽の盛名あるをきゝて耻悔せし如きはや、人意を強うするに足るの美談にわらずや、今の滔々たる女流中、女史の如き、意氣、節操、を持する輩幾くかある、予は左の自述の詩を讀むで、感甚だ堪ざるものあり、三從總欠一生涯、漸逐衰顔益放懷、擬試畫毫裂羅帶、爲柱瓢口卸銀釵、吟題洗雨蕉箋破、塗抹書空雁字排、唯恐人間疎繡婦、強將風月做吾儕、結末二句の如きは自から風月に耽るの本意にあらざるを洩らしたるものならざらんや。(未完)

## 黒澤登幾子 (第二卷第十)

### 下村三四吉

登幾子が國事を憂へ藩主の冤を纏述せる長歌はかくて、畏くも 叡覽を經るに至りぬ。實にその歌中にいへるが如く「野末に匂ふ梅が香を天津空まで傳へあげ」彼が初志を貫徹しけり。是れ必竟その身を顧みざる熱誠と和歌の徳とによれるなり 雨雪の厄風霜の苦に耐へて、芳香天地を薰する梅花は、採て以て登幾子の清操に比すべし。

既にして、登幾子は、京都を出で、岩清水社に謁でて祈請をこらし、それより、澗川を下りて大坂に着き、また讃岐に渡り、琴平宮その他に參詣し、再び大坂に歸航し、一商家に投宿せり。この行は、餘波に過ぎざれども、登幾子が用意の周到なりしことを見るに足らん。蓋し、幕府の偵察甚

だ嚴密なるを以て、巡禮の態して京都に達するこ  
とを得たるより、歌を宮中に上りし以來更に、  
神社佛刹を巡拜して、益々嫌疑を避けんとしたる  
なり。登幾女は固より一身を顧みず、しかも、家  
にはなほ老母の在るあり、藩主の冤枉は未だ洗雪  
せらるべきを必せず、されば、徒に幕吏の手に執  
へらるるが如きは、及ぶかぎりこれを免れんこと  
を怠らざりき。

幕吏の嚴密なる注意と奇察なる眼とは、遂にこ  
の忠烈なる登幾女を脱せしめず、四月朔日登幾女  
は逮捕せられ、牢屋敷揚り屋入りの身となりぬ。  
さきに座田維貞に差出し、乙夜の覽にも入りたる  
彼の長歌につきて種々取調べられ、はては水戸藩  
公の内旨を承けて上京せらるるならんとの糺問をさへ  
受けり。登幾子屈せずして曰く、今回の事たる國

家の一大事にこれあり、加ふるに藩公の謹慎の儀  
は全く冤罪によれることなれば、國のため、一天  
万乗の君のため、藩公のために、おのがおもふと  
ころを達せんとて上京しつ、また外夷どもの我神  
州に入りこみて、この尊き御國のけがされんこと  
を憂へて神社佛寺へは參拜しつるなり、藩公の密  
旨を承けたりなどは以ての外の事なりと、意氣  
凜然たり。幕吏も亦これを如何ともすること能は  
ず。

十一日に及びて京都へ引渡すべしとの達しあり  
て、京都牢屋敷會所の揚り屋入りとなり、所司代  
役所、西町奉行所等にて糺問せらるること數回に  
及びしも、登幾女は前に申し開ける如くにて、い  
さゝかかはれることばもなかりき。

次ぎて、五月十五日には、更に江戸表に於いて

糺問すべしとて押送せらる。同廿八日品川に着き  
 それより、一時江戸北町奉行所の假牢に入れられ  
 じが、後には傳馬町の獄に移されぬ。この間にも  
 數回の召喚糺問を受けたれど、ここにはくはしう  
 記さず、登幾は意氣毫も撓まず、全く國恩に報い  
 奉らざる爲なるよしを申立て、係りの役人をして  
 また追窮の語なきに至らしめき。心事正大にして  
 意氣凜烈、固よりさもあるべし。

この年の十月、幕府は大に意士を處刑して、幕  
 政に反對せる氣焰を鎮壓せんとして、所謂安政の  
 大獄はこれなり。(事は津崎矩子の傳中に詳し)こ  
 のとき登幾女は追放に處せられ、江戸十里四方、  
 山城國常陸國御構の事となれり。御構とはその指  
 定の地に立ち入ることを禁ぜらるるなり。よりて  
 登幾女は郷里に近き下野の茂木村に寄寓して、老

母の安否をも問ひ慰めたり。

後數年を経るうちに、幕府は内外の多難に迫ら  
 れて、土崩瓦解の有様に陥り、遂に、王政は復古  
 せられ明治維新の世となりぬ。されば登幾女も、  
 今は別に赦免の令は受けねど、冤罪は自ら雪がれ  
 自由に郷里に歸棲し得るに至れり。

明治七年、登幾女歳六十九、茨城縣廳より其の  
 忠烈の行事を具して朝廷に恩命を上請しけるに、  
 その忠節を嘉賞せられ終身現米十石を下賜せらる  
 べき優旨を下したまはりき、その褒辭は曰く、「夙  
 に志を尊王に篤くし、力を國事に盡くし、安政  
 戊午の歳潜に京師に上り、幽囚に就けりといへど  
 も、終始その志を渝へず、因てその奇特を賞し  
 米十石を汝登幾に賜ひ、以てその身を終へしむ」  
 と。嗚呼これ登幾女の心事行狀を悉くせり、余

輩更はいまに賞讃せうさんの蛇足だそくを添そふるを要たうせず。

(完 結)

しきしまの大和心をくみて知る

なにはのわしのつゆのめぐみは

(登 麓 女)



落 椿

雨 峰 生

墓門一樹の椿あり、年ごとにさきては空しくちる、  
たまく小女の手折りて父の墓にまゝぐるあり、  
よりてこの歌をつくる

寂さびし小寺のもりかげに

春の恵みにうるはひて

咲さきし椿の七重八重

運命さだめやいかに謠ふべき

梅の香ひにくらぶれば

浮動にめぐる姿なく

櫻の色いろにくらぶれば

宿りを契る影もなし

苦悶くもんに疲する時なきも

落ちては塵に埋れゆく

夢の聞しきこばし春ゆけば

葩はなびらすむに地に施しさぬ

白百合、莖くきさみゆるせ

榮華えいげあざける情こころなく

咲きてはちりてゆく年を

寂さびびたることに暮くすかな

八千歳やちとせながさをぶさすと

謠うたはれにける俤おとこも

今は昔むかししの夢のあと

其の零丁ぜいぢやうを誰たれれぞしる

かの庵守あやしる僧そうひとり

手折ておりてかさす墓はかの門

あゝ苦くるむせる石の碑

榮えいえはかくて消けえゆくか

たゞ梵唄ぼんがの音かすか

黄泉よみに客きやくのゆきよきにける

其の聖せいき日の紀念きねんにと

飾かざらるこゝろを君きみしるか

かねにさえゆく夕日ゆふひかけ

閼伽あかたむけゆく乙女子おとこの

父思ちちをひでに折おらるとさ

花はなには深ふかき涙なみだあり

小雨こさめのはれしわけのそら

晞あきもやらぬ露つゆの玉たま

墓はかの主ぬしじにそゝぐとさ

誰たれぞ情なさなしと云いふべしや

あはれ空そらしくこの春はるも

落おづる椿つばきははかなくて

この寂寥さびに終はるとも

われはまごころ寄よするかな



君の御蔭

鷺 水

なつかしき吾故里なる豊岡に、こたび尋常小學校新築落成せしといふを聞きて、うれしさのあまり、うたひ出しがまゝを送りて二百にあまる愛らしの數へ子どもに分ち給へけるは

(上)

治る御代の三十余ハヒサヨ

六歳の春を積ねける

頃は彌生の空高き

霞につゝく朝烟

民のかまども豊なる

岡べにたちし學校はまかびや

文の林の奥ふかく

わけ入れそめん道しるべ

國の光をいとしく

かゝやかさんと教へ子が

學の海に漕ぎ出る

ともゆなとかん港なり

(下)

君が御蔭にたちそめし

その學びやに光得て

緑いやますかよとん甲山

ふもとをめぐる寒川さむかわも

清き流れの末遠く

沖津島山波たゝで

よる藻かくなるうなるらも

爪木つまぎ木の實を拾ふ子も

もれぬ恵みの君が代は

千代に八千代と歌ひつゝ

祝ふ今日こそうれしけれ

祝ふ今日こそ樂しけれ」

(甲山は故里の山にて寒川は故里なる川なりかし)

病める友を思ひて

東くみ子

行末とはき  
 いかに楽しく  
 こゝらの月日  
 わはれ幸なき  
 病める友をば  
 曾て遊びし  
 君病みまして  
 さまよふ心

\* \* \*

世の春を  
 夢みつゝ  
 すぎけむを  
 わが友よ  
 たすけつゝ  
 その浦に  
 今ひとりに  
 如何ならむ

\* \* \*

涙に似たる  
 物思ふ窓に  
 世をうくひすの  
 垣の紅梅

春の雨  
 灑く夕  
 聲かいて  
 花は落ちぬ

友のつとひ

つねを

まなひの窓のはらからよ

今日のつとひの嬉しさに

幼なごころのうつくしく

ともに語らんいつまでも

心の友のここかして

群れあふれたるこのむしろ

はたるも雪もおもはず

樂しき節をあはせまし

花の袂 全 人

かすむ春野に はるの もえらぶる

すみれ蒲公英 たは つくづくし

はなの袂に たもと あまるまで

摘むうれしさを かど 門にまつ

わがたらちねに かた ちかげてむ

# 説林



## 歐米の家庭教育及幼稚園

保育視察談 (承前)

下田次郎

それから佛蘭西になりますと、佛蘭西は極く開けて居らぬ隠くすと云ふ方で、外國人は容易に家庭の有様を見ることは出来ぬ、それから懇意の人に頼んでも通入られぬ、だから下宿屋か或は宿屋に泊る、家庭は判らぬ、お坊さんの立てた高等女

學校は多くあつて私立で上流社會の子女が多く入學するが外と交通遮断で昔し高野山は女は登られぬ様に男は這入ることは出来ぬ、他の高等女學校は生徒の多數は父兄や下女が門まで送り迎ひ致します、家の内ではドウやつて居るか判りませぬ佛蘭西の主義は自由と平等と兄弟と云ふことを真つこりに翳して居る、で自由の思想が染み渡つて子供でも十歳以上になると父兄は子供を壓制せぬ故に子供が親の手に合はぬと云ふのがまゝゝゝゝ、向うでは幼稚園はエコール、マテルテルと云つて母の仕事をするると云ふことである、巴里は奢侈な所であるが多數の細君は極めて節儉で家を濟へることは上手でありまして餘程經濟的に考へて居る巴里で面白いのにはクレシエと云つて赤子幼兒を預る、或は赤子を養ふ所です、御承知の通り佛蘭

西は今日人口が殆んど居すわりの有様にゐるので、全体から言へば少し増すが小児は大事にせねばならぬ。少しの小児でも物にしやうと云ふので巴里には孤兒院があつて、警察の拾ひ上げた赤子。又食はれぬと言つて持つて来る赤子を收容して養ふて居ります。此處に(寫真を示して)乳母車の様な寢臺の内に小児を入れて居りますが斯ういふ工合にやつて居ります、舊とは小児を門の處に持つて行つて夜など誰が置いたか判らずにして置いたから、今日は晝でもお母さんが持つて来て事情を言ふと受取ると同時にお母さんも保姆として呉れることがある、棄子養育院に參つた時は十五六人居て皆乳母が附いて居ります、また棄子でない方で父母が病氣中とか又は母が勞働して其間赤子を預け乳母が乳を吞ますもありません、棄子を預つ

て置くといふ二種類の赤子の置場があります、此處にはまだ大きな住所不定等の孤兒を預るので、併し大凡二週間以内地方の孤兒院に分けるのでありますから、出入常なく、どん／＼變つて居ます、二三日で地方へまわされるのもある、赤兒もどうぞあります。それで、棄てる様な赤子は病氣が多いから熱病とか傳染病の赤子は隔離室があつて他の子に感らぬ様になつて居る、これ(寫真を示し)は乳母が赤子を抱いて居る所であります、西洋では赤子をグル／＼捲いて捲いた切りにして居ります、それから此處に小児の預所と云つても少し多い小児はお母さんが働いて居る間待つて居る所があります、それから巴里では彼方此方にクレーシユといふ小児を預る所があります、其の一つに參りましたが、衛生上の設備が能く出來

て居て、婦人が二人居て小兒は三十三人、其處へ生れて十五日から三歳までの子供が来る、申込が多くて這入れぬ程である、私の行たのは第五區であるが其處にも三つある、巴里全体では大分ある、これは一日に六錢程拂へば着物から食事を給して世話して呉れるのであります、食後には寢床があつて寝る、又運動には圓い柵があつて其内で運動し、外には椅子があつて並んで居ります、これ(寫眞を示し)は赤子が寝て居るのであります、が斯ういふ様な工合にやつて居ります、日本では斯ういふ様なことを一向やつて居らぬと思ひます、それからクーブーズダンファンと云いつて妊娠六ヶ月位以後の者を物にしやうと云ふ保育器で、詰まり人口を殖やさうと云ふのです、小兒の月足らずは冷却して死ぬ、生れて數時間で身體が冷却す

る、これまで冷却する時には綿などで包んでも營養がないから冷えて来る、金屬で箱を造つて其床下に管があつて湯を通す、寒暖計があつて温度を見て居る、空氣抜きが上下にある、又時に依れば酸素とかオゾンなどを機械的に送るやうになつて居る、場合々々に應じてやつて居ります、此處(寫眞を示し)に小兒が入られて寝て居る。これは巴里の博覽會にも出て居たし、巴里の銀座通りには何時でもやつて居ります、大事の小兒が徐かに冷却して死なんとする時に此の機械で家の内で暖められる、今やつて居るは貧困の者に廣告の爲めにして居るので巴里ではそれが目に着きます、ロシアのペテルブルグ市の孤兒院は巴里に劣らぬ程盛んに赤子が百人以上も居て乳母が澤山ついて居つたを見受けました、

英吉利では重なる學校は私立で、公立學校は中等以下の資力乏い者が行く、金の有る者は私立の學校に行いて父兄の要求に依つてドウでもなると云ふ風であり、學校々々に依りて特長があるやうである、佛蘭西、獨逸に於ては文部省が一の命令を下すと全國同じ事をやるが、英吉利はさういふ風で餘程差ひがある、詰まり生徒を全体と見ずしてそれ々の資性を有つて居る個々の人間として教育をして居る様である、家に依つては先生を置いて一人々々の教育をして居る所もあり、家と學校の連絡は近くて密な様である、學校そのものが家庭の性質を帯びて居る、寄宿舎の如きも澤山の生徒が居ても我國の如く多數の者が一の室に居てがやゝとして居る所はありませぬ、生徒數の割に家が大きくなつて居ります、それは他

の問題であるが兎に角家と家庭の關係は近い様であります、英國の家庭は初めて行くと窮窟で、巴里は朝何時迄でも寝て居らるゝ、英國は朝は八時か八時半、其頃に鐘が鳴ると一時に食堂に集つて食ふ、晝は一時頃、夕は七時頃になるとチャンと其處に出て食ふ、キチリとして居るから慣れると便利になります。

それから大陸に於ては一の家を一族が有つて居ることは少くして二階には別の家族が居り、又三階に別の家族が居るが、英國は一族で一の家を有つて居るは珍らしくない、自分の家は庭も皆な自分で有つて居る、其間の趣きが大陸と餘程異つて居る様であります、英國は經濟の發達した國であるが、案外不經濟の處もあつて細君がモツと、經濟の出來ると思ふは下女を使ふに一寸した

所でも三人も使ふ、多い所は十人も使ふ、佛蘭西から來た目には餘程無駄があるやうに考へる、子供は餘程自由な所があり、一般に人間が上品である、ゼントルマンと云ふ語は他の語に譯せられぬ含蓄がある、さうして家族間でも言語を慎む、客と主人が話す時に細君が來れば主人が話を止める事もある（日本では無遠慮に話す場合に於て）日本では随分家族の間に無作法な言語の行はるゝことが澤山あるやうに考へるのであります。

それから一体田舎の生活が好きであつて、學校でも教場に花を挿すは何でもない、少し金の有る學校は窓の外に植木鉢が澤山並べてあります、少し良き家になると温室があつて其内に花を蓄へて運動がてら養ふて居る。

それから向うではサンドウと云ふ方のある人があ

る、サンドウの体操學校と云ふものがあり又、体育雜誌を出して居ますが、これで赤子に賞與を與へる、即ち毎月一番体格の良い赤子に、拾圓を與へる、今度は何處の御母さんが斯ういふ子を産んだと云ふことが出て居る、英國では幼稚園としては一二ツしか見なかつたと思ひます、小學校の方を見たのであります、粘土をつくねるか、手工の事は餘程發達して居るやうであります、英國は實際から來るので議論は後と廻はし、實際の方が餘程發達して居ります、英國には國民フレール組合及フレール會を始め多くの幼稚園保姆養成所及幼稚園があります。

伊太利は羅馬で見た所によると日本よりは劣つて居る所もあります、唯々手工が上手で幼稚園の婦母が柳の皮を鉤に掛けた様な物で籠を編んだり

巾着を作つたり餘程精工なものがあります、それから今度は亞米利加、亞米利加も高等の學校と云ふものは多くは私立であつて、英吉利のオックスフォード、ケンブリッヂが私立である様に、米國のハーバード、エール、なども私立でございます、其内教員養成所として大なるは紐育、コロンビヤ大學の一番良い、其處にも幼稚園がありま

す其横にホレースマン學校と云ふがあつて、それは模範學校で、人の見に来る學校です、向ふでは模範學校と練習學校は區別して居る、日本は模範學校と練習學校と一緒に居るが、日本は上流社會の子女も練習用にせらるる、西洋では練習用に供せられぬ、日本では政府の造られた學校は今日の所實際宜いでありますから上流社會の子女も練習學校に這入つて居るこれは本則では

ない、コロンビヤの横に模範學校があつて幼稚園もあり、幼稚園は私の行つた時は余り仕事を

して居らぬであつたが、模範學校であるから生徒は奇麗な着物を着た者ばかりで、鐵道馬車の練習がござりまして、一人が車になつて町の角の所に子供が立つて居る、先生が何丁目々々と云ふと車となつて居る子供が立ちまつて、又車が行く様にして練習して居りました、又極めて簡単な書山、天幕、車、ならば斯ういふ(眞似)ものを書きそれに且とかYとか繪に似た字を交せて教へて居りました、米國では高等教育を受くる者は男子より女子が多い、故に高等學校に行つても向うでは共同教育であるから小學校を始め女だけを見ることは出来ぬ何處でも一緒である、中等以上の學校は女が多數で男は寄せて貰ふて居る様に隅にチヨ



ンバリ居る學校もありません、殆んど女子に政治の他は許されぬことはない様になつて居る、故に高等の家庭に於ては教育の有る女は澤山居ります、向うは金を儲ければ宜いと云ふのであるから、早くから男は商業とか工業とか金の儲かるやう實地に入るが、女は富有であるなら暇もあり金もあると云ふので高等の教育を受ける、受けた曉になつて夫を穿鑿する時に、自分より夫の學力が低いと云ふので不平で生涯獨身と云ふ者が多くある、原因はそればかりでもありません、亞米利加は幼稚園が盛んで、私の見たのはコロンピヤとシカゴの大學だけであり、シカゴの大學附屬小學校長にデューブーンと云ふ人があつて、種々の事を考へて居ります、人類の發達と個人の發達は其間に似寄りがある、昔し人類の野蠻の時は機を織つ

たり煮炊きをしたり、家事を自らやつて居つた、今日は分業が進んで家事をやる者は家事をやるものとなつたが昔しはさうは行かぬ、それで人類の初めは小兒の時に能く當つて居るものであるから簡單な編物とか煮炊きとか云ふものを子供にやらすは適當の事であると云ふので幼稚園でも煮炊きをやらすジャムとか一寸物を煮て蓄へる、編物と云つても小さい易いものであります、學校に居ても成るべく家と區別のないやうにしやうと云ふので學校が家庭にでき父兄も時々行つて居ります、餘程餘所の學校と様子が差ふ様であります、此人は「學校と社會」と云ふ本を著はして自分の意見を述べて居ります。

(次號にて完結)



うづき (四月の和名)

雑 緑

せ ぐ 生

うづきは四月の和名なり。梅はとび、櫻は落ちて、跡繼せる桃李、これも存外壽命短じ。なさけ知らぬ雨、吾れ等が恨みに遠慮なく、意地悪るの風、人の憂ひををもしろがればなり。紅 白紫 赤などの濃き淡き色々、いつしか緑とかはなりぬ。萌黄とはなりぬ。青とはなりぬ、緑世界とや言はいはむ、然も遠ざかれる山の麓、彼方此方の森

の木の間、雪の消え残りて白さに見ゆる、そも何ぞ、萬緑叢中數點の白、是ぞこの頃の暗にもしるき卯つ木花、殊に垣根くにも時めきて見ゆ。あはれ幽谷を出で、喬木に歌ひてし鳥、宿なくなりし爲か、やうく山里に歸り行くも、我れに代りて暗夜さへたどりて來鳴く郭公のあるを知ればなるべし。

春すぎて卯月になればさかさばの

ときはのみこそ色まさりけれ

(讀人未詳)

卯づきとて咲く卯の花に木つたひて

いつしかさなく山ほととぎす

(源 宗 干)

この卯月まで、何夢みつゝ眠りけむ、今目ごめたりと咲出ける櫻花ありければ、「紀のとしさだ」

といへる人、

わはれ(嗚呼りつば)てふとをあまたに

やらじとや春に後(あ)けて獨(ひとり)さくらむ

と詠(よ)みしとか。げに一株(いちしゆ)の櫻(よくら)よく三千(さんぜん)の愛(あい)を一  
身(み)に負(お)はんとや。世(よ)は實(じつ)に卯(う)の花(はな)ぞかし。

清輔(せいぷ)朝臣(あそみ)ち、卯(う)づきの名(な)の起原(おきげん)を説(と)きて「卯(う)の花(はな)

さかりに開(ひ)くる故(ゆゑ)に、うの花(はな)月(つき)といふをあやまれ

り」と言(い)ひ、惠比須草(えびすくさ)(森宮(もりみや)龍翁(りゆうおう)撰(せん)に、四月(しがつ)を卯

月(つき)といふ事(こと)は、卯(う)の花(はな)の咲(さ)くころなれば、卯(う)の花(はな)

月(つき)と云(い)ふを略(りやく)して卯(う)月(つき)といふ」と説(と)きし事(こと)、げに

もと思(おも)はる。

又(また)この月(つき)の異名(いめい)の歌(うた)に見(み)えたるは

卯(う)の花(はな)月(つき) (鴨(鴨) 長(長) 明(明))

うちはふき今(いま)も鳴(な)かなんはとゝきす

卯(う)の花(はな)夜(よ)さかり過(か)り行(ゆ)く

得(と)鳥(と)羽(は)月(つき) (定(定) 家(家) 卿(卿))

藤(ふじ)の花(はな)夏(なつ)にかゝれるおく山(やま)の

下(した)にやまたんえとりはの月(つき)

花(はな)残(のこ)しつ(つ)月(つき) (後(後)鳥(鳥)羽(羽)院(院)御(御)製(製))

暮(く)れはて、春(はる)の名(な)残(のこ)や山(やま)ふかみ

しげみかくれの花(はな)残(のこ)し月(つき)

博(博) 覽(覽) 會(會)

や て

春風(しゅんぷう)駘(たい)蕩(たう)花(はな)は笑(わら)ひ鳥(と)は歌(うた)ふ彌(や)生(せい)の空(そら)、難(な)波(は)の都(みやこ)

には第(だい)五(ご)回(かい)内(うち)國(くに)勸(くわん)業(ぎやう)博(はく)覽(らん)會(かい)を開(ひ)かれぬ、三(さん)韓(かん)の

船(ふね)吳(ご)の船(ふね)つとひて來(き)にし茅(ち)淳(じゆん)の海(うみ)、昔(むかし)ながらに神(かみ)

さびて千(ち)木(き)高(たか)しげる高(かう)津(つ)の宮(みや)、銀(ぎん)城(じやう)の天(てん)守(しゅ)今(いま)も儼(げん)

然(ぜん)、濱(はま)松(まつ)の緑(ろく)いやまして、大(だい)厦(しゃ)高(かう)樓(ろう)は三(さん)州(しゅう)の野(の)

覆(おほ)ひ、帆(は)や煙(けむり)はく大(だい)船(せん)小(せう)舟(ふね)港(みなと)に滿(み)てり、宜(い)なり

帝國第一の商業地、故あるかな此地に博覽會の設  
けある。

新聞雜誌先きを争ひて其の案内記參觀記を吾人  
にもたらし已に剩す所なし、しかもこゝに此の題  
目を提ふ頗る異なるに似たりと雖も、別に思ひの  
わればなり。

百聞一見に如かずとは小兒尙能く之を解す、然  
りと雖も其の初めに當つてや、此の文明の利器尙  
發達の進路に於て頗る困難なるものなりしなり、  
此に於て吾人聊か其歴史につきて記し社會進歩の  
跡を尋ねんとす、余が此の題目を提へし意眞に此  
にあるのみ。

西曆十八世紀の末年即ち一千七百九十八年佛蘭  
西に於て皇帝ナポレオンの下に聞かれたるもの、  
此れ實に博覽會の嚆矢たり、時已に文化頗る開け

百般の工藝長足の進歩をなしたりと雖も、其の開  
催に當つてや或は之を御祭騒ぎのものとなし、或  
は徒らに金錢を消費して之に對する利益なしと論  
ずるものありき、其の出品者の數も僅かに百十人  
なりしなり、然りと雖も其の功果は決して争ふべ  
きにわらざるなり、越えて三年一千八百一年更に  
第二回の催あり、事非常の成功をなし其の翌年直  
ちに第三回を開くの運に至りたり、爾來數年を隔  
つる毎に開催せられ、遂に英國に於ける萬國大博  
覽會となりしなり、試みに宇内各國の主なるもの  
につきて、第一回開期を尋ねんか、

埃太利	一八二〇	獨	乙	一八二二
西班牙	一八二七	北米合衆國		一八二八
英國	一八二八	露西亞		一八二九
伊太利	一八二九	葡萄牙		一八四四

日本

一八七七

以上はこれ内國博覽會即ち其の一國內に限るもの、更に萬國大博覽會につき考へん、其の設立當時の困難は實に層一層のものなりき、當時英國は女皇ヴィクトリヤ上に在り、一八四〇年其の従弟なるアルバート親王と婚したりしが、英國々民中或は親王か外國人たるの故を以て嫌焉たらざるものありしなり、而して大博覽會は實に親王に依つて企てられしなり、前路平安ならざるは推して知るべきなり。

一千八百四十九年六月親王は美術協會の總集會に於て其の提議をなし、此か設立を議決し、翌年に至りては遂に一八五一年を以て之を開催する事に決し、期成委員を任命し親王自から委員長となれり、廿萬磅の保證準備金は立所に其の賛成者よ

五十

り寄附せられたり、次で倫敦市長は國內各市町長及選舉區長を其の官舎に招宴し、博覽會の事業に賛成協力せん事を勸誘し、親王亦臨席して一場の演説をなしたりき、

抑も大博覽會を開設するの必要は世界各國の人民をして現時に於ける人類工藝の發達點及將來に於ける發達進歩の出發點を詳細に吟味し明白に活現せしむるに在り

とは其の演説中の一節なり、大博覽會の目的を説明し得て明快穩當又遺憾なしと謂つべきなり。

然りと雖も此の計畫に對しては反對者なきにあらざるなり、或は之を嘲笑するあり、或は何等の良果をも結ぶなきを疑ふあり、而して親王を猶外國人と爲し徒らに學者をたらふものとし、此の如き人の獎勵保護には争かて實際的事業の成立を見

るべけんやと信ずるものも多かりしなり、其の甚だしきに至つては、各國人民が遊覧の爲め倫敦に集合するを以て英國を哭ふべき無比の災害となし遂に衆議院に絶叫すらく「諸君の妻女を警戒せよ諸君の生命と財産を警戒せよ」と又天帝は宜しく速に大風雨大雷鳴を降下して、此の不詳なる博覽會に充てられたる建築を粉碎せしめよと祈禱を捧げたりと公言し、更に人間の怨敵は外國人をして我商業を掠奪せしめたと同時に又我名譽をも奪略し去らしめん爲め大博覽會の觀念を吾人に鼓吹したりとまで狂呼するものありしなり。

かゝる幾多の反對、幾多の非難の勢力容易に悔るべからざるものありき、然りと雖も遂に能く成効したる所以のもの、全く親王一人の力にありしもの、如し、賛成したる委員の多數は唯親王の發

起なるが故に賛成したりしに過ぎざりしなり、委員會は熟議を擬らし遂にハイデパークを以て其の會場に充てんと決するや、反對者は忽ちに之を以て公園を汚瀆し、公衆の情遊を妨害し、又公園の美を發壞し去るものとなし、頗る激烈なる反對を試み、遂に親王をして自から私かに其の成功を危ふみ、此の如き計畫を肇めたることの輕舉を悔ひ時には之を中廢せんとまで思はしむるに至れり、嗚呼たとひ當時英國の事情はかゝる恐怖を有しかる反對説を出すを得ざるものありしなりとはいへ、文化の開げざる、社會の進歩せざるの時に當りては、黄金も尙瓦礫たりしを知りて餘りあるなり。

然れども親王は不撓不屈此等の困難に絶望せずして、計畫は着々進歩せり、會場は有名なるパツ

クストン氏に依つて建てられぬ、これ即ち水晶宮なり、玻璃と鐵との大樓閣は粹然としてハイデパークの碧草綠芝の中に崛起せり、万国の特産を隈なく一場に蒐むるさへ既に前古未會有の事に屬す況んや「コーイヌール」の光怪陸離たる玻璃の下に覆はれたる椰子樹の婆娑參差たる、其の他噴泉彫像鐵物貨錠炭塊の類又は組糸細工機械物若くは東洋の有らゆる織物等一として珍らしく驚くべきものにあらざるはなく、豪華の景、炫輝の觀交々眼前に錯雜したるの情景、今日筆舌の能く悉し得べき所にあらざりしなり。

かくして大博覽會は凡べて豫想外に成効し、百四十四日の長會期間、常に觀客を以て充され、時に十万の入場者を一時に其の館内に見たることさへありしなり。爾來時勢の變遷は此等の事業に對

する國民の期望を一變せしめ、博覽會は工業の發達を圖り人民の交際を奨め其他文明の事業を助くるに必要なる機關として認識せらるゝに至れり、此より以降大博覽會は幾たびか開設せられ、其の盛大なる亦此の比にあらず、一千八百六十七年以來開かれたる數度の巴里大博覽會、近くは昨年の會の如き、規模の宏大なる品數の饒多なる類別の整頓せる遊覽人の郡衆せる固より同日の論に非ざるも、獨りハイデパークの博覽會が人の腦底に印象せられたる所のものに至つては特に非常なるものありしなり、事業は未會有なり群集は斬新なり況んや世界の工業を列するに玻璃の建築を以てしたるをや。

ハイデパークの博覽會開會當日の模様に関し女皇の宸筆に成れるもの頗ぶる趣味あるものあり、

曰く

一大盛事こそ起りたれ——非常の成效見事の勝利——光榮あり又成效するに堪へたる偉観かな朕は朕の親愛なるアルバート及朕の國の爲め永く之を誇らざるを得ず……公園の景況は又驚くべきものなりし……潮の如く流れ來り流れて去る群衆、鼓鞞肩摩せる車馬軍人の盛なる宛かも朕が即位式の當日にも比べつべし……而も我親愛なるアルバートに成效あらせんとて祈る朕が心の安からざる、中々に即位式の時よりも深し、空は麗らかなり、よろづ入り亂れて人の心は皆昂れり……黒鐵の門前より十字形堂の横邊を瞥見すれば、風に戦げる椰子樹其他様々の草花、塑像の應接に違なき殊には廊内廊外に列席せる無数の人民、朕が臨場の際啾唳として吹

奏したる喇叭の音は深く朕の心を動かして終生忘るゝ能はざる成效を與へたり……更に又地球上各國の工業を一所に集めたる平和的祝典の發起者、即ち親愛なる我良人、此等は皆人の心を成效せしめぬ、此日のみは寔に千秋万歳朽つるの時なかるべし、願くは我最愛なるアルバートに祝福あれ、我最愛の國に祝福あれ……と、以て當日の光景を詳にすべく、女皇滿腔の喜悅を察すべし、良人の心を盡し身を盡して辛苦經營せる事業の成效に對する妻君の熱心さて無邪氣にしてまた可憐のものなる哉。

博覽會の發達實に此の如し、我國に於ても已に幕末當時より此等諸外國の設立に出品をしたりしが、遂に明治十年に至りて第一回を上野公園内に創設したりしなり、十四年の第二回、廿三年の第



三回同しく東京に於て開かれぬ、第四回は廿八年に京都にあり、當時日清戰役大勝を得たるの後なりしを以て頗る盛況を極めたり、而して今回に及び、戰捷國としての博覽會世界大國としての博覽會能く其の名稱に叶ふものありや否や、或は恐る遂に島國的なるを免がれざらん事を。

道すがら

和歌子

○一人の男兒愛らしき小犬を足にて蹴り、キャン／＼さげぶをおもしろがりて頻に喜ぶ。店の番頭達皆見て笑へり。情なき人のふるまひかな物言ぬ善類を哀憐せよとかなしみ訴ふるは犬のみならず○雨降る日洋服高下駄の人に逢ふ。似合はぬよりはむしろ滑稽の感起る。同じく和洋とりませても

和服に靴はあやしき感なし。

○姉と弟むつまじくうちつれ行く小學生あり。おのれ本郷の通を行く時さだめの如く後より來るが常なり。此二兒何時も何事をか樂しげに語り笑ひ見るもうひはしく愛らしわはれ幼き人の話の種いづれは無邪氣に罪なき事なるべし。身体さへ揃ひて健康に見ゆれば之を並べて見る親心のうれしさはいかに。

○前の二人を見て三町ばかりも行けば向方より來る車上の啞女二人を見るもまた常なり。啞らしき口元は結ばるゝ事なくいづれも兩手をふりうごかして顔を見合せ手眞似と目にてたえず語りゆく。姉妹にはあらずと思はるれど共にかの育臨學校にといそぐなるべし。あはれ二もとの口なしの花とわれさへ思ふをまして親々の心はいかに。

○朝なく通る本郷のとある坂の上にてけさの富士はとふりかへるが我例なり。けふはまだそこに達せぬ二三間手前より「アラ御富士様」と無邪氣に叫ぶこゑす。見れば幼き一群が其櫛にも似たらん手にて白妙なる山のけさは砲兵工廠の黒烟を透してあやしき色に見ゆるをば指さして喜べるにてありき。

○同じ時に。辛うじてあゆみを運ぶと見ゆる幼き女兒掌に萌え出でたるばかりの青草少しのせて姉らしき兒のあとになりて何事をか語りながらチヨロ〜と行く。此草今より此罪なき兒達の飯事の材料となるにこそと思ふに、しばし共に遊びて其愛らしき手に成りたる御馳走のほしかりき。

静岡紀行

牧羊

降つて降つて降りしきつた二月三日の大雪を衝いて、同級文科生は水戸の地方へと出かけた。理科生十九名は、積つた雪の、此處彼處日蔭に消えもやらぬ六日の午前七時卅分といふに、最急行新橋發の濱車に乗り込んで、静岡市へ向つたのである。職員四人而して牧羊も其一人である。

七日は京都本願寺の法主の葬式といふので、此列車では割引往復切符を發賣する所から、左なきだに込み合ひ勝ちの急行列車は、又一入の混雑！やつと乗り込んだが、偕て客車内の同志は、四分五裂、彼方の一隅に五六人、此方の片隅に二三人、それも大方身動きの出来ぬ中に割り込んだ事とて、思ひ切つて脊中を椅せかけ腰も下ろせぬ急

屈な苦しさー

かゝる事には一切無頓着な列車は、定めの時刻が来るや否や一聲の汽笛ともにも、回轉し始めた。畑も野も、山も岡も大方はまだ雪だ、北向きの方丈は、夫でも舍人の白粉つけた様に、所々に消え跡の斑點をといめて居る。大森の邊だつたと思ふ、ブンを鼻を打つたゆかしの薫りに、これはと思つて顔を出して眺めた所が、満目寂寥の光景の中に、一輪二輪の花の魁！

最急行といふ丈けに、車を停むる驛も少く、瞬間に國府津も過ぎた、此邊さすがに暖くてか、積れる雪もまことに少い、右の方一面に擴がれる野原には、今を盛りの梅樹は、林をなして雪と色香を闘はして居る。同勢の一人、斯道に堪能の評ある人、筆とりて

しばしとてといまるまどのかほるまで

國府津の里の梅さきにけり

と書きつけた。

富士はとりわけ鮮かに見られた、其姿、其肌殊に數日このかた一入こらした其装には、たれもかれもたいあつとたいへる許りであつた。

此時分からだつたと思ふ、同勢の中で、天狗俳諧といふものを始めたのは、いろ／＼面白いのも出来た様だつたが、吾は始終眞面目な議論に時を過して居たので、よくは覺えない。

やがて山北を過ぎた、どこの片隅からか低聲で「箱根の山は天下の險」など、唱ふのが聞こえた。それも瞬く中に通り過ぎて、さて辨當を認められた沼津の驛、こゝは四分間停車場である。

夫から一時間も過ぎたか、午後一時近くといふ

に静岡に着いた。大東館の若者出で迎へて、かひなく荷物……と云つても、片掛や四季袋などを受け取る。

旅館に上つて休息すること、殆んど三十分、やがて立ち出で、師範學校女子部へと向つた、女子部と男子部とは、彼れ是れ二十分路も距たつて居るから、余程不便だといふこと、だが、早晚獨立の女子師範學校になる相だ。

角谷校長は女子部へ行つて吾等を待つて居て呉れた。行くと會員大村よね子、例のこゝ顔で先づ玄關に出て居られた。先年茲へ來た時には主任教諭に戸城君が居られたにと、聊か感慨に堪えなかつた。授業はもはや一時間といふので、急いで音楽と、數學の時間とを參觀して、校舎なども見て、やがて四時過ぐる頃そこを出で、こゝを去

ること、約十町許の林濟寺へと向つた。

林濟寺といふのは、もと徳川家康が、今川氏に人質となつた時に、學問などを習つた所といふので名高い禪宗寺である。尤も二三回も兵火に罹つた相だが、家康公手習の間などは其當時の儘に再建したのだ相だ、納むる所の寶物に見るべきものが少くない。金岡の佛畫、古法眼の鳴、瓜の掛物、義元の自畫賛、正親町天皇の親翰、など其他にもいろ／＼あつた、奇麗な寺だが、規模が比較的小さい。

歸途、道の右側に今川義元の祠堂を訪ふた、義元の位牌と其四將のとを并せ祭つて居る徹けき祠である。あはれ駿遠參に一時勇威忒ぶ者なかりし猛將も、たま／＼婦子の名を成して、一朝桶狭間の露と化しては、時に唯だ羈客の後を訪ふ者ある

のみ、英魂綿々として、長へに恨を此處に留むるのであらう。

道を元來一所に引つ返へして、淺間神社に參うた。これは木花咲耶姫を祭つて居る。當地第一の神社で、規模頗る弘壯を極めたものだ。位置は女子部の眞向へで、靜幡山を其境内に取り入れて居る。今は市の公園を兼ねて居るのだが、公園としてはまだことに寂しくつて、勿論夕方ではあつたが、廣い境内に人つ子一人も見付らない。

一同勇を鼓して山に登つた。無數の石階を走り上つて、奥の院を見て更に進むこと半町許り、ここに一茶店あり、而も人影を見ずだ、此處より市中を一目に見て、近く富士の白扇を望む。快哉を呼ぶを禁じ得なかつた者は、恐らく牧羊一人ではなかつたらう。唱歌を唱うもあれば、富士の寫生

をするもありで、暫らくは得も云へぬ此夕景色に見惚れた。

五十八

例のこの道に名ある君 筆とりて

富士の根は空にそへりてうち渡す

駿河國原かすみこめつゝ、

この度こそはと、牧羊もひねり出したぞれ歌は左の如しである。

うすくこき群山の上にぬき出る

富士をてらして夕日落ちんとす。

火燈し頭歸館した。角谷校長に大村よね子の君は始終案内の勞を取られたが、此夕二人の外に山元首席田邊主事なども來られ、其他會員松山姉及女學校教員など打ち揃うて來訪せられ、歌留多やトランプに一座頗るの賑ひであつた。

明くれば七日 今日も昨日に變らぬ快晴の天氣

の嬉しさ。午前八時を過ぎて、先づ師範學校男子部を參觀した。當校の音楽擔任大橋教諭は最も斯道教授に熱心の名ある人で、樂器使用法の一齊教授をなさんがために、無聲風琴を工夫したのだ相で、一々丁寧に之を説明せられた。次ぎて男子部三年生の圖書の教授を參觀した。茲で新奇の教授といふのは、黑板書法である。双手單線法、双手復線法など、師範生としては最も有益な書法であると思はれた。で、一体に此學校は音楽や圖書には最も良好の成績を納めて居るといふことが、至極尤だと思ふ。

時間が迫つたので、附屬小學校を巡覽して、幼稚園に移つた。これは市立で、會員松山姉がやつて居られるのだが師範學校では、之を借りて先生の授業練習にあてゝ居る。男子師範のすぐ向側に

ある。園児の數は、百五六十人だといふことで、遊戯をやるのを見た。一寸考へられたのは、幼稚園の子どもとしては、遊戯は中々上出来であつたが、あまり甘すぎて、反つて子供っぽい所の見えなかつたことである。而し他の幼稚園に比べてはさすがにと思はれる點があつた。

夫から私立高等女學校に向つた、が。時は既に十一時を過ぎて、且つ此日は土曜日なりしたため、授業は參觀することが出来なかつた。で、校舎寄宿舎を一覽した、舎には目下百八十人の女生が居る相で、松山姉が舎監の任に當られて居る。一体此學校は過ぎし當時當市に女子の教育を司る所がなかつた爲め、彼の松山姉などが主として奮發して起されたのだ相で、市内……これ程の市内で唯一の女學校であるのだ。所が機運めぐり來り

て、この四月からは縣立高等女學校が設立せられるといふことになつて、松山姉等は、自分の素志が達せられるといふので喜んで女子教育の任を其方に譲つて、これは閉校すべしとのことである。然し裏面にはいろ／＼の内情があるといふこと。

夫から一旦旅館に歸つて、午後二時大村姉及附屬の加藤訓導の案内で、私立漆工學校を參觀したこれは新築後まだ一年位のもので生徒は現今卅五六名、目下七十名を募集中である。平均年齢は十三才位といふこと、土曜日だから、成績品などを見せて貰つて歸つた。

歸途漆器陳列場に立ち寄りて、買物など購ひ、三時過ぐる頃歸館した。

四時四十何分といふ最急行列車は稍後れて、五時頃に静岡を發するのである。山葵漬に、小饅頭

に、竹細工にさては漆器など、さまざまの土産物を四季袋につめ込んで。

見送り呉れたる人々に別を告げて、とう／＼市を後に残した。列車内は相變らずの大混雜 大急屈！

此處も矢張天狗俳諧の流行を見た。富士はいろ／＼に姿を變えて、同勢を見送つて居る。筆を取つて取り敢えず、かき付けたる牧羊の歌に

君見ずや大和心は不二の山

千古變らぬいろうつくしき

動きなき御代の姿の氣高さを

富士のみやまに仰き見る哉

これでも歌といふものになつて居るだらうかと思せば、例の君やをら、筆取りて認められたのは、次に

近つけばいよく高き富士の根は

すめら御國のすがたなるらん

箱根を過る頃は、月殊の外明であつた。月雪

花の三をあちらこちらと、忙はしく眺め回はしな  
から、辨當など認めつゝ行く中にはや品川に着し

保育事項實施程度

三ノ組

た。かくて新橋に着したのは、夜の九時半も過ぎ  
て十時に近かつた、乗り合の馬車に割り込んで歸  
校したのは、彼れこれ十一時であつたらう。

(完)

女子高等師範學校附屬幼稚園

遊	(八)(七)(六)(五)(四)(三)(二)(一) 雁一 て 雀 蓮 風 鳩 禮 の の 遊
嬉	ふ く 花 車
唱	(八)(七)(六)(五)(四)(三)(二)(一) 雁風 て 蓮 水 箱 鳩 桃 太 郎 さ ん
歌	の の の 庭 遊 花 車
談	(四)(三)(二)(一) 桃太郎 雞と親雞 舌切雀 犬の小供を救ひし話
話	



(壹)(貳)(参)(肆)	雷お池二 池の列 の行 蛙鯉進	遊
(伍)(陸)(柒)(捌)	と螢お池 んのの ば蛙鯉	唱
(玖)(拾)(十一)(十二)	浦獅兎犬 島子とま 太とと 耶風龜影	談
		話

二ノ組

		六
		毬
(八)(七)(六)(五)(四)(三)(二)(一)	軍橋汽門椅履瀛塔 車隆道子掛車	積
		木
(五)(四)(三)(二)(一)	汽燈門雁汽 車籠車	板
		ならべ
(六)(五)(四)(三)(二)(一)	水紋紋菊果眼 ニのも 魚形一花の鏡	箬
		環
(六)(五)(四)(三)(二)(一)	旗四レ池山幼 角箸魚雁	貝
		ならべ
(四)(三)(二)(一)	梯杖池山 子	蓋
		き
(八)(七)(六)(五)(四)(三)(二)(一)	雀て×船山肩屏本 ふッ く×掛風	紙
		たみ

手技

(九)	うづまき
(十)(九)	さ稽雀 よなら

(九)燈臺二船 (八)家二 (七)家一 (六)門二 (五)宮一 (四)宮一 (三)燈交番 (二)橋二 (一)汽本箱	積木
(七)紋二 (六)船二 (五)手籠 (四)橋二 (三)紋形 (二)燈形 (一)船臺	板ならべ
(七)山二 (六)門計 (五)時臺 (四)植木 (三)汽鉢 (二)菓子鉢 (一)旗車	箸環ならべ
(九)人餅 (八)飾 (七)蝶 (六)軍扇 (五)渦巻 (四)眼鏡 (三)魚 (二)山 (一)池	紐おき
(七)紋形 (六)花 (五)瓢 (四)船 (三)家 (二)三 (一)三 日 角 月 鏡	貝ならべ
(九)梨 (八)櫻 (七)旗 (六)提 (五)山 二 賞 灯 月	書き方
(七)獨樂 (六)同 (五)同 (四)同 (三)同 (二)同 (一)紋形	紙きり
(六)蟬 (五)鬼 (四)塵 (三)襦 (二)團 取 袷 扇 船 子 入 團	紙たみ
(十)屏風 (九)机 (八)魚 (七)旗 (六)風 (五)鏡 (四)四衛 (三)瀾次 (二)獨 角 兵 樂 鈴	豆細工
(八)摸樣附盆 (七)盆 (六)卵 (五)林 (四)飾 (三)櫻 (二)球 (一)球	粘土細工

手技

(六)汽 (七)盲 (八)輪 (九)猫 の拾 車遊ひ	(六)睡 (七)く (八)と (九)り 鼠
(六)夕 (七)桃 (八)太 (九)太 車こ耶子耶立	(六)夕 (七)桃 (八)太 (九)太 車こ耶子耶立
(六)立 (七)耶 (八)子 (九)耶 車こ	(六)立 (七)耶 (八)子 (九)耶 車こ

<p>(十五) (十四) (十三) (十二) (十一) (十) (九) (八) (七) (六) (五) (四) (三) (二) (一)</p> <p>鑽 四 又 花 時 花 探          列 行 輪 計 賣 し          進 進 輪 計 り 物</p>	遊
<p>(十四) (十三) (十二) (十一) (十) (九) (八) (七) (六) (五) (四) (三) (二) (一)</p> <p>師 軍 大 小 大 小 大 小 大 小 大 小 大 小 大 小          の ご さ さ さ さ さ さ さ さ さ さ さ さ さ さ さ          風 つ む む む む む む む む む む む む む む む む</p>	嬉
<p>(十四) (十三) (十二) (十一) (十) (九) (八) (七) (六) (五) (四) (三) (二) (一)</p> <p>加 田 神 羅 牛 猿 花 牛 鳥 蟻 蝸 鳥          藤 原 代 生 若 合 咲 太 と 牛 と 水          正 麻 の 門 丸 戰 爺 小 人 鼠 と お 小 瓶          退 太 話 丸 戰 爺 小 人 鼠 と お 小 瓶</p>	唱
<p>(十四) (十三) (十二) (十一) (十) (九) (八) (七) (六) (五) (四) (三) (二) (一)</p> <p>加 田 神 羅 牛 猿 花 牛 鳥 蟻 蝸 鳥          藤 原 代 生 門 丸 戰 爺 小 人 鼠 と お 小 瓶</p>	歌
<p>(十四) (十三) (十二) (十一) (十) (九) (八) (七) (六) (五) (四) (三) (二) (一)</p> <p>加 田 神 羅 牛 猿 花 牛 鳥 蟻 蝸 鳥          藤 原 代 生 門 丸 戰 爺 小 人 鼠 と お 小 瓶</p>	談
<p>(十四) (十三) (十二) (十一) (十) (九) (八) (七) (六) (五) (四) (三) (二) (一)</p> <p>加 田 神 羅 牛 猿 花 牛 鳥 蟻 蝸 鳥          藤 原 代 生 門 丸 戰 爺 小 人 鼠 と お 小 瓶</p>	話

一ノ組

(三) (五) 数 弧
形 面

手技

(九) 鐵樓	(八) 門ニ家	(七) 軍艦と船	(六) 宮ニ鳥居	(五) 西洋館	(四) 宮ニ燈籠	(三) 紋形	(二) 橋ニ郵便函	(一) 風呂ニ水槽	積木
(二十) 蝶	(十九) 葛蒲ニ	(十八) 軍艦	(十七) 紋形三	(十六) 葛蒲	(十五) 紋形二	(十四) 汽車	(十三) 鳳車	(十二) 家	板ならべ
(三十) 汽車	(二十九) 軍艦	(二十八) 紋形三	(二十七) 葛蒲	(二十六) 紋形二	(二十五) 梅ニ松	(二十四) 石燈籠	(二十三) 紋形	(二十二) 紋形	簀環ならべ
			(十四) 軍艦	(十三) 魚	(十二) 團扇	(十一) 船	(十) 門		書き方
			(六) 紋形二	(五) 扇二	(四) 紋形二	(三) 船	(二) 旗	(一) 本	縫取り
			(十三) 同	(十二) 同	(十一) 同	(十) 同	(九) 同	(八) 紋形	紙きり
			(八) 同	(七) 同	(六) 十一行一	(五) 同	(四) 同	(三) 九行一	紙おり
									網くみ
(十七) 鶴	(十五) 鯨	(十四) 四角箱	(十三) 四方	(十二) 四足	(十一) 三	(十) 朝鮮船	(九) 宮	(八) 紋形	紙たみ
			(廿) 吹流	(十九) 椅子	(十八) 建札	(十七) 手籠	(十六) 二艘船	(十五) 鐵砲船	豆細工
				(十四) 白ニ杵	(十三) 太鼓	(十二) 花	(十一) 鳥居	(十) 犬	粘土細工
								(九) 馬	
								(八) 胡羅	
								(七) 藤	
								(六) 蓆	
								(五) 盆	
								(四) 盆	
								(三) 盆	
								(二) 盆	
								(一) 盆	

參 考

以上排列シタルモノノ中談話ハ別ニ順序ヲ示シタルモノニアラズ  
時機ニ應ジテ此中ヨリ授クルモノニシテ又其種類モ茲ニ掲ゲタル  
モノノミニ留マラズ適當ト認メタルモノハ協議ノ上採擇スルモノ  
ナリ

一ツノ組ニ排當シタル談話ハ必ズ其組ニ於テ授ケテ他ノ組ニ用ヒ  
ザルニアラズ方法ニヨリ談話ノ簡單複雑幼兒ノ理解力ニ適當ナラ  
シムルヲ得ルモノハ三ノ組ニ之ヲ授ケ更ニ其形式ヲ異ニシテ二ノ  
組一ノ組ニモ適用シ得ルモノナリ

自然物自然現象人工品等ニ關係セル智識ハ保育要項ニ規定シタル  
ガ如ク之等ノ談話中ニ於テ收得セシメ又ハ庭園若クハ室内ニ於テ  
偶發的ニ授クル方法ヲ取ルヲ以テ茲ニ採録セズ缺ク方ニ關スル談  
話モ全上ノ理由ニヨリテ其事項ヲ載セズ



●女子高等師範學校

在校生徒の本學年最終の

土曜會は先月廿一日開かれしが席上井口教授の女  
子の体育に關し及米國女子體育の狀況等につきて  
趣味深き談話ありたりといふ。▲同校附屬小學校  
及幼稚園は先月二十八日を以て卒業及終業式舉行  
▲本校及高等女學校は同卅日左の順序によりて舉  
行せりといふ。詳細は次號に報ずべし

卒業證書授與式次第

午前九時三十分

着席

一、唱歌

皇后陛下御製「みがはずば」

(總員起立)

二、卒業證書授與

本校本科卒業證書授與

本校選科卒業證書授與

本校國語漢文專修科卒業證書授與

附屬高等女學校卒業證書授與

三、唱歌

「ふるへばはてなき」

四、校長告辭

五、文部大臣祝辭

六、生徒謝辭

本校本科卒業生總代

本校選科卒業生總代

本校國語漢文專修科卒業生總代

附屬高等女學校卒業生總代

七、唱歌

「はてしなき」

以上

尚同校今回の本科其他の卒業生は文科に廿六人、理科に十九人、技藝科に十九人、選科に六人、國語漢文專修科に三十九人にして、皆夫々各地に赴任する事となりたりといふ。

△國語體操專修科

今回新に同校に設置せらるべき同科は入學志望者、意外の多數にて先月中旬既に百四十名に達したりといふ。

●學習院初等科の學生募集

學習院初等科にて

は二年級以上六年級まで各級へ各若干名宛、一年級へ凡そ六十名の學生を募集して之を二學級となし、來九月より登學を許すよしにて博く一般士民の優良なる子弟を求めつゝあり。因に同院士民學生の授業料は三年級までは年九圓、四年級以上は十二圓、學年始めは九月なるが故に、それまでに滿六歳に達するものには皆入學を許可するよし。

●東京盲啞學校教員練習科

同規則は先月六日の官報を以て發布せられたり。左に之を抄記す

文部省令第七號 (明治三六、三、六官報)

第一條 東京盲啞學校教員練習科生徒ハ卒業ノ日ヨリ二箇年間文部大臣ノ指定ニ從ヒ盲啞ノ

教育ニ從事スル義務アルモノトス

第二條 前條ノ義務ヲ盡スコト能ハザル事故生

シタルトキハ其理由ヲ具シテ義務ノ免除ヲ文

部大臣ニ出願スルコトヲ得

第三條 第一條ノ義務ヲ盡サル者アルトキハ

在學中給與シタル學資ノ全部又ハ幾部ヲ償還

セシム但前條ニ依リ義務ヲ免除セラレタル者

ハ學資ノ償還ヲ免除スルコトアルベシ

東京盲啞學校教員練習科規則(明治三六、三)

第一條 本科ハ盲啞ノ教育ニ從事スベキモノヲ養成スルヲ以テ

目的トス

第二條 學科目ハ修身、教育、國語、生理、圖畫、器械使用法

唱歌及体操トス

但專ラ盲人若ハ聾啞ノ教育ニ從事セントスル者ハ特ニ必要

ト認メザル學科目ヲ課セザルコトアルベシ

第三條 生徒ノ定員ハ十名トス

第四條 修業年限ハ一ケ年トシ之ヲ分テ左ノ三學期トス

第一學期 四月一日ヨリ八月三十一日マデ

第二學期 九月一日ヨリ十二月三十一日マデ

第三學期 翌年一月一日ヨリ三月三十一日マデ

第五條 本科ニ入學セシムベキ者ノ資格左ノ如シ

一 身体健康ニシテ品行方正ナル者

二 尋常小學校本科正教員免許狀ヲ有スル者若ハ之ト同等以  
上ノ學力アル者

三 年齢男子ハ二十歳以上女子ハ十八歳以上ニシテ家事ニ係  
累ナキ者

東京盲啞學校、京都盲啞院ヲ卒業シ盲啞ノ教育ニ從事スルニ  
適當ト認メタル者ニハ特ニ入學ヲ許可シ一科目若ハ數科目ヲ

練習セシムルコトアルベシ

第六條 生徒ハ毎年一回之ヲ募集シ試験ノ上入學ヲ許可ス  
但シ尋常小學校本科正教員ノ免許狀ヲ有シ地方長官ノ薦舉

ニ係ル者ニハ試験ヲ行ハザルコトアルベシ

第七條 學科課程ハ左ノ如シ

學科目	學期		
	第一學期	第二學期	第三學期
修身	一	一	一
教育	八	八	二六
國語	三	三	三
生理	三	三	三
圖畫	三	三	三
機械使用法	四	四	四

臨畫寫生畫  
生理及衛生  
ノ大要  
講讀及文法  
ノ大要  
盲啞ノ教育  
及教育史  
盲啞ノ教  
授法  
盲啞ノ教育  
實地授業

三  
三  
三  
三  
三  
三  
三  
三

上  
上  
上  
上  
上  
上  
上  
上

熟字表・熟字タイ  
ノライタイ  
熟字ステレオ  
ブレイカー  
簡體器

唱歌	二	平易ナル唱	二	全	上
体操	三	普通体操及遊嬉	三		
合計	二七		二七		二七

第八條 地方長官ニ於テ生徒ヲ薦擧スルムキハ薦擧書ニ本人ノ履歴書ヲ添付スベシ

薦擧ニ係ラザル入學志願者ハ所屬地方廳ヲ經テ入學願書ヲ差出スベシ

前項ノ願書ニハ履歴書及月籍吏ノ作成シタル戸籍謄本ヲ添付スベシ

第十一條 入學ヲ許可セラレタル生徒ニハ在學中學費トシテ一ヶ月金七圓ヲ補給ス

第十二條 生徒在學中自己ノ便宜ニ依リ退學ヲ願フ者又ハ品行修ラザルタメ退學ヲ命セラレタル者ニハ支給セラレタル學費ヲ償還セシム

●芝高等女學校 府下昨年度の高等女學校不就

學者は殆んど千數百名に及びしを以て今度芝區三田四國町水産學校跡に高等女學校を設立し度旨柵橋、小川、山本、杉浦外三氏より文部省へ出願し

たるに直に認可せられしを以て、本月より開校の筈にて、昨月來生徒を募集せり。

●私立濟美學校 同校は嘉納治五郎、鷹司熙通

上田萬年、近衛篤鷹、菊地大麓、目賀田種太郎、箕作佳吉、澁澤榮一外數氏の發企にて設立せられしものにて尋常高等小學校、中學校并に高等女學校を通じて十一箇年を以て卒業せしむる組織となし嘉納、上田、目賀田の三氏之が創立委員として

取敢へず神田區正則英語學校の一部を以て假校舎に於て本月より尋常小學第一學年に入べき男女兒童六十名を募集せり。小學授業料は毎月六圓にして入學金金二百圓なるが、同一家の者にて二人目

以後の入學者に對しては入學金を要せずとなり、該校設立の趣意は家庭の事情甚だしく懸隔せざる兒童を收容し、夙に小學期に於て品性陶冶の基礎

六十名を募集せり。小學授業料は毎月六圓にして入學金金二百圓なるが、同一家の者にて二人目以後の入學者に對しては入學金を要せずとなり、該校設立の趣意は家庭の事情甚だしく懸隔せざる兒童を收容し、夙に小學期に於て品性陶冶の基礎



を確立し、中學期を通じて更に修養を加へ、斯くして十分なる成效を期するに在るが故に教員の住宅及び寄宿寮をも校内に設け、子女教育に熱心なる父兄の希望を満足とするものなりとの事なるが、先月中旬既に、三十名の入學申込ありたりといふ。

●女子寫眞學院 同校は牛込西五軒町に新設し實業的寫眞技師養成の目的にて傍ら普通學を授け貧學生の爲めには特に實務科隨意科等を附設し其便宜を計るといふ。

●音樂演奏會 元東京音樂學校教授山勢松韻氏は明治十三年音樂取調掛を命ぜられ三十三年迄斯界に貢獻する處少なからずとて、同校の職員生徒は今度一個の紀念品を贈らん爲め、先月十五日午後一時より同校に於て演奏會を催せり演奏の種

類は箏、尺八、三曲、ピアノ獨奏、オルガン獨奏ピアノ、ヅワイオリン合奏、管絃合奏等なりき。

●教員檢定試験 本年度に於ける師範學校中學校高等女學校の教員檢定試験は、受験願書の提出を五月末日までとし、八月より豫備試験に着手し十一月より翌年二月に亘りて本試験を結了する豫定なりと、又本年度は習字科を除き法制經濟音樂及び獨逸語の諸科を加へ、且つ法制經濟の檢定は修身若くは教育を併せて出願するにあらざれば許可せざることゝしたりといふ。

●府立第一高等女學校談話會 本學年より淺草七軒町に移轉することゝなりたる同校は、先月廿四日最終の談話會を現校舎に開けり、最も面白く感ぜられたるは、一年級岡本誠子の讀本朗讀、二年級石渡花子の談話鼻剪り、三年級全體の唱歌老

渡子、北田酉子の談話、ピンセント及ハートリー等にて、其他五年級生徒の肉質入裁判の喜劇は最も面白く演ぜられたり、此他に英語の對話などもありしが、音聲何れも低くて聞き取り難かりしは残念なりき。十二時退散せり。

●同盟母の會大會　之は三月二十一日の午後零時半から神田の青年會館で開かれた。少時後れて往つたから開會の辭や開會の歌は聞くことができなかつたですが主の祈禱、体操、自由進行、輪の歌、同盟會祝歌、花の歌、鶯、農夫、水車、菓子屋、桃太郎、炭焼、鍛冶屋、武夫、五羽の家鳩などの唱歌や遊嬉を幼稚園の幼兒がするのを見ました。又此唱歌遊嬉の間に保母の五人武夫と良き子供の話、留岡幸助君の演説、その他獨吟があつた。留岡幸助君演説の大意は次の通である。教育は教

育の爲にするものではない、子供の爲にするのである。家庭教育上注意すべき事は、一、母の温情、二、子供を自由にする事、三、獨立心の養成、子供を神に紹介して最後の獨立に資する事、四、實力を以て社會に立つ考をいれる事、五、早く家庭より子弟を放すはよろしからず十五六才までは是非家庭に置くべき事、右等終つて祈禱があつて閉會になつた。

●子を持つた人の注意　織るが如き東京の街路に於て、幼き子供等が時に群をなして遊び戯れ、時に自轉車人力車等にしかれて危害を受くるのみならず、甚しく通行の妨害をなすことあるに由り此度警察署長會議に於て訓示されたる事項の中左の一項ありたりといふ。

街路の中央に於て兒童相集りて種々の遊戯を爲し爲に通行の妨げとなり隨つて不測の危害を蒙むる者影からず特に日没の頃に

於て甚しき事是等は巡查をして兒童の父兄に對して注意を加へしむべき事

●信愛幼稚園の保育振

近頃大阪川口舊居留地

の二番に設けたる信愛幼稚園と云ふのは其保育振り大分他のものとは違ふやうなり同園保婦廣瀬なか氏の報導により其概略を記す。

一此園は凡て家庭風に保育致します

一此園は普通の保育料三十錢であります

一此園は父兄の望みにより早朝より午后四時半まで保育致します此分を特別保育として保育料は五十錢であります

但し午後三時に衛生無害の菓子に適宜に與へます

一此園は特別、普通の區別なく父兄の望みにより幼児を父兄の宅まで送ります此送り賃一ヶ月二十錢であります

但し遠路は別に送り賃を御約束致します

一此園は父兄の望みにより晝の辨當を與へます此辨當料は四錢であります

但し食物は衛生上の注意を致します

一此園は父兄の望みにより晝夜通して幼児を預ります此分を寄宿保育として其費用は一ヶ月三圓五十錢であります

但し月謝共であります

一此園は父兄の望みにより普通特別寄宿の區別なく月謝は日割

勘定として日々納むるも差支ありません

一此園は父兄の宅の都合により休日と雖も預ります此分は一ヶ月の月謝の外に十錢預り料として申受けます

一此園は普通保育の幼児と雖も父兄の望みにより臨時に特別保育の如く早朝より四時半まで預ります

但し夫れは臨時の事故別に預り料は受けません

尙此園は萬事家庭の有様と同じ様にして居るので園内には小使を置かず保婦等が住居して一家の母親の如く子供を世話せるなり(幼稚園新聞)

●大坂盲啞院救助部 大坂盲啞院にては此度救助部を設け盲啞の孤兒貧困者を救助養育する事となれりといふ。

●和歌山高等女學校の服制 同縣の同校にては從來海老茶袴の制はありしも、服装一様ならざりしをもつて、今回左のごとく決定し、來る四月の新入學者より實施せしめ現在生は着々改良せしむべき方針なりと

一、従来の袴は色や、赤色に過ぎたるを改め黒すみたる海老茶色とし紋柄は用ぬしめざる事

一、袴の素地はモスか若くはセーツに一定する事

一、徽章は自色細毛二線にして裾より上三寸五分乃至四寸の所に施す

一、衣服袖丈は一尺五寸に定むること

●山形縣幼稚園  
元來東北地方は幼稚園の數極めて少數なるが、今四月よりは全地に新に開設する由にて目下保母を尋ねつゝありとのことなり。

●足利幼稚園  
久しく保母に空位なりし全幼稚園も愈々本月より北野晴子(元羽田)氏赴仕して専ら盡力せらるゝ事になりたりといふ。

●野口幽香子氏  
華族女學校の同氏は此休暇中同校より大阪博覽會に出張を命ぜられ、本月二日下阪せりとのことなり。

奇聞一束

●波斯帝千六百餘人の妃を去る  
ニユーカヅル、クロニクルのコンスタンチノール通信に據れば波斯皇帝は、此程千七百人の皇妃中より千六百四十人に暇を賜ふと、比較的僅少なる六十人の妃と殘りの生涯を比較上の獨身者として送らるゝことに決せられ、暇を遣はされたる妃には、各二千圓を授けらるゝ筈なり、而して其多くは宮中官吏の妻妾たるべしと云ふ。

●鹽にて築きたる市街  
露國波蘭のクラコーに近きケルブルグと稱する一市街は地下に在るのみならず、市街の家屋は悉く岩鹽を以て築かれ、凡そ三千の人民は皆鹽業に従事居れり同市に於て殊に入目を驚かすものは同じく純白なる岩鹽を以て築かれたる大伽藍にして、電氣燈を點じたる光景の美麗なること想像に餘れり、露國の先帝は曾て此寺院に赴き此美を嘆稱して、殊に寶石入の燦爛たる祭壇を造らしめて、同寺に寄附したることあり、傳染病の如きは同市民の全く解せざるものにして、同市民には長命者頗る多しと云ふ。

●未婚者は健康ならず  
已婚者は未婚者より概して健康優るものなりとは、從來已に屢説明せられたることある問題なるが、今又英のホツフマンは千九百年の統計に據り、スベクテーター評論に於て其事實を證明して曰く、男女兩性の未婚者の死亡數に總ての年齢に於て(十五歳より四十四歳までの女子を除き)已婚者の死亡數より遙に多し、又男女の未婚者の死亡數は六十五歳以下の寡婦の死亡數より少し、六十五歳以上の寡婦に就きては明瞭ならず、男女の已婚者の死亡數は總ての年齢に於て寡婦の死亡

數より少なし、未婚男子の死亡數は總ての年齢に於て未婚女子よりも多し、四十歳以上に於ては已婚男子の死亡數已婚女子の死亡數より多し、餘夫の死亡數は總ての年齢に於て寡婦の死亡數よりも多しと。

●仙臺松操學校 (私立仙臺市本荒町)

目的 本校ハ小學校裁縫科教員タラント欲スルモノヲ養成シ併セテ一家ノ主婦タルヘキモノニ普

通裁縫ヲ教授スルヲ以テ目的トス

教科ヲ分チテ尋常高等ノ二科トス

學科目ハ裁縫禮法音樂ノ三科目トス但高等科ニハ副學科トシテ教育國語ノ二科ヲ置ク

課程表略ス

修業年限、尋常科四ヶ月高等科八ヶ月通シテ一ヶ

年トス

學年 九月一日ヨリ始マリ翌年八月卅一日ニ終ル

入學 入學期ハ九月ニ定ムレトモ臨時入學ヲ許ス

入學生ハ左ノ資格ヲ有スルモノトス

本校卒業ノ上ハ小學校裁縫科教員タラント欲ス

ル志望ニシテ入學セントスルモノハ高等小學校

卒業以上ノ學力ヲ有シ品行端正身體強健ナルモ

その他ノ入學志望者ハ尋常小學校卒業ノモノ或

ハコレト同等ノ學力ヲ有シ操行正シク身體健全

ナルモノタルベシ

束修金一圓

授業料五十錢教育國語ノ二科ヲ修ムルモノハ更ラ

ニ一ヶ月二十錢ヲ出スベシ

寄宿舎一ヶ月五圓十錢外ニ電燈料十錢但シ物價ノ

高低ニヨリ變更スヘシ

雜費授業材料費一ヶ月凡金三圓二十錢小遣及入浴

料一ヶ月一圓二十錢

校長 朴澤三代治

因ニ記ス該校ハ明治十二年ノ創設ニシテ爾來今日迄卒業セシモノ二千有余名ニ達シ其過半ハ小學校裁縫科教員トナレルモノ多シ爲メニ去ル二十七年五月設函者ノ裁縫教授ニ熱心ナル功績上聞ニ達シ監授褒賞ヲ賜ハリシト云フ

東京には本郷に渡邊縫裁女學校あり、生徒數千を以て數ふることなれども、校風といふか如きは如何にや、詳細は何れ調査の上報導すべし、神田には古くより女子職業學校あり之も他日參觀の上報導致すべし

### 新刊紹介

#### ●實教育學教科書 一冊

黒田定治共著  
東基吉共著

教科書として最も適當した、述で且つ教育學の何たるを知るにも極めて適當な書物として吾人は之を紹介する。全體を緒論と目的論と方法論とに分けて、緒論には教育の學と術と、教育學と他の科學との關係、教育の意義などを説き目的論に於ては古來よりの教育上の諸主義殊に近世に至りて頓に其聲を高めた個人主義と社

會主義とを評論し去つて遂に教育の目的を詳解して、中々嶄新な意見を吐いて居る。方法論に於ては劈頭ヘルバルトの教授目的論を論評して餘隙なからしめたる所、殊に訓練の篇は最も注意して理論と實際とに詳細を盡くし且つ修身教授と訓練との關係を明瞭にし、訓練を以て修身の直學教授なりとなせる所の如き、其實辭に關する立論の如き最も見るべきである。要するに本書は滔々たる他の著書の上に確に一頭地を抽いたもので、讀者をして確に最近教育學に付きて確固たる概念を與ふべき良書である。(定價七十五錢。發行所、東京京橋區南傳馬町二ノ五目黒書店)

#### ●湘烟日記 全一冊

石川榮司共編  
藤生てい共編

有名なる明治の女豪男爵夫人故中島俊子の遺稿病中日記と詩抄と漫筆とを載せ、始めに此書の出來たる由來として編者が大磯なる男爵家を訪ひしに筆を起し、續きて女子の略歴は石川氏の筆になれり。序文にもあるが如く、湘烟日記は其中の主なる一篇病中日誌を取りて表題とせるものなり。然れども此書によりて女史の才學女子の、淑徳女史の意志、凡そ女史の面影の大平に寫し出されて餘蘊なし、然をいば、女史の履歴は略歴とせで、今少し詳ならん事を欲するのみ。蓋し女史の如きは、當今滔々たる所謂才女の、偏へに利を好み名を衒ひ、一世を瞞着せんとして、賞賛と非難と相半するが如きものさ異なるを以てなり。然れども、元來此書は女史の遺稿を世に公にするの趣意なるを以て、傳の詳なるは其評さる所なりしならんか。宛に角、吾等は是所に近世の好出版として、殊に女教師女學生諸君に一讀再讀あらんことを勧むるに躊躇

せざるものなり。(定價六十錢。東京本郷森川町一、育成會發行)

●成効 第一卷第六號

東京本郷駒込千駄木町  
五〇同雜雜誌社

見るから吐氣を催しきうな、浮氣々ツブリな文字を羅列した出版物の多い中に、始終健全鞏固な文字を以て獨り異彩を放つて居るのは實に本誌である。吾等は是非とも之を青年の机上に進めろ。本誌載する所、苦學八年の文藝、元真博士の青年修養、幸田露伴氏の文話教則等其他字々皆金玉の價値あるものが多い。(定價一冊十錢、郵税一錢、月一回)

●少年世界文學 第六編 六勇士

例のごとく表紙、口繪、鮮明な挿繪はまづ少年の目を喜ばせるであらう。此編には死とむぐら、糸つむぎ姫木こりのむすめ、六勇士、鶯鳥姫、料理番の六かある。皆ゾリム童話集からとつたもので、それ々の寓意が面白く讀まる。中にも六勇士は少年の好奇心を満足さすであろう。きこりの娘はふと命令に背く。隠す、偽る、強情を張るといふ人間の弱點をよくあらはし、遂に悔いて罪を赦される處までよい教訓を與へて居る。

●少年世界文學 第七編 蛤の草紙

初の蛤の草紙は天笠の縮羅といふ男の親孝行をめで、天女がわざと下つて来て女房になる、しまいには又天に歸るといふので耳遠いやうな天笠の話がうまく日本的に譯されて居る。次の梵天國は日本と梵天國と羅刹國とにわたつた話なので少年は其盛な想像方に訴へておもしろく一息に讀み行く間に自ら因果應報といふ事を感じて居る。其次の築島は經ヶ島の由來なので平相國のき

かぬ氣がよくあらはれ國春父子の情はよく寫されて居る。

●少年世界文學 第八編 梅王松王櫻丸

此編の初めはよく芝居で演る官原傳援手習鑑でアツサリと少年らしく、しかもよく三人の忠義が寫されて居るから之を讀む少年は喜んで深き同情を此三人に寄せ道真公時平公に對する歴史前興味をも合せて惹起するであろう。次にはいがみの權太の事がある。いはゆる千本櫻の中なので初はいかにも悪者であつた權太が急に善い人間になり打て變つた忠義者になる話、「ア、悪にも強ければ善にも強い」と感じながら讀み下す果して最終の頁に此詞が書かれてあつた。終の狐忠信、之も千本櫻で親狐の皮で、できた鼓に附き添ふ子狐の孝心のかわい、事、蕃類にもまごゝろのある事を自然に感ぜしめ動物に寄する同情を養ふ益も慥かばあると信ずる。

●幼稚園新聞 毎月二回發行

由來關西地方は東京附近に比して、幼稚園の發達隆盛を極むる所父兄、保母、教員等皆斯道に熱心なる人々多し。此新聞も亦大阪に於て新に生れたるものにして既に第二號を出せり。フレール傳、恩物の話、幼稚園に關する實驗談、母の注意等こまゝと極めて平易にて併も有益なる記載多し。近來さかく出版物を以て利を射んとする者多き時に方り、此實着なる新聞を見る、吾等は其將來益健全の發達を遂げんことを祈る。(定價一部二錢、郵税五厘。大阪市東區島町二ノ九三幼稚園新聞社發行)

會 報

幹事會 三月廿四日午後二時女子高等師範學校  
附屬幼稚園に於て開會總會のことにつきて協議せ

出席者 野口ゆか 大島小春 林ふみ  
和田 藏 松村久 下田 鶴

總會 本會總會は、來る本月廿一日火曜日午  
後一時卅分より附屬幼稚園にて開會すること、な  
り成績品、參考品の展覽、名家の演説、餘興、會  
員の實驗談等ある筈なり。會員諸君には奮つて御  
來會あらんことを望む。

入會ノ部

富山縣師範學校

武井綱子

秋田高等女學校  
瀧島縣高等女學校

福岡市高等女學校  
茨城縣立高等女學校

富山縣師範學校

山形縣米澤高等女學校

山形縣米澤高等女學校

山形縣米澤高等女學校

山形縣米澤高等女學校

仙臺市元鍛冶町八

京都府紀伊郡深草村

鳥取市大槻町一二

長崎縣南高來郡神代村

新潟縣立高等女學校

鹿兒島縣高等女學校

橫濱市南太田町一七五五

小原みえの  
野地たか子

右中村五六氏紹介

大江きま

右東基吉氏紹介

小田梅乃  
森 縁 子

右武井綱子氏紹介

山根のぶ

田村いよ

齊藤せい

阿部のぶ

石山けい

下條ますみ

福 間 恭

右林ふみ子氏紹介

立石直太郎

右中村五六氏紹介

鎌田きく

右菊地教世氏紹介

山本定野  
村田よわ

右喜多見さき氏紹介



京都市下京區不明門通七條上ル私立常葉幼稚園 藤 澤 周

岐阜高等女學校

右下田鶴氏紹介

伊藤 藤 ちか  
右事務所申込

本郷區森川町一番地

長崎縣北高來郡古賀村

藤 並 京  
松尾 ヲネ

大分縣高等女學校

大分縣高等女學校

右岡田折技氏紹介

甲斐 はな

茨城縣立高等女學校

水戸市上市大町五番地

右小田梅乃氏紹介

坂井 みどり

横須賀第二横須賀高等小學校

麴町區平河町五ノ二十四

右松岡さち氏紹介

本多 しま子

長野縣松本町出居番

長野縣松本幼稚園

右野口ゆかり氏紹介

大澤 かれ

小石川區高田豐川町女子大學校第二寮舎

岐阜縣大垣高等女學校

右山川いく子氏紹介

武野 八重  
佐藤 藻子  
飯田 さき

石川縣高等女學校

和歌山縣高等女學校

富山縣師範學校

奈良縣高等女學校

鳥取縣高等女學校

德島縣高等女學校

豊橋高等女學校

淡路高等女學校

明石女子師範學校

香川縣師範學校

埼玉縣高等女學校

栃木縣高等女學校

宮城縣高等女學校

松江市高等女學校

群馬縣師範學校

福岡縣師範學校

沖繩縣高等女學校

小倉高等女學校

新潟縣長岡高等女學校

大阪府岸和田高等女學校

北海道札幌高等女學校

山口縣船木德基女學校

大阪市東區内平野町二ノ三九

成田 ひさ

森山 ふさ

赤江 よね

田中 八重

木村 茂枝

高田 芳女

和知 てる

打越 ふじ

橋本 ひさし

甲斐 なほみ

村越 よう

横山 つや

推川 たま

小泉 ちよ

平沼 みか

渡邊 ちよ

杉村 まつ

秋葉 せい

林 玉子

飯山 らん

山田 はる

宮本 てる

右小柳ゆき子氏紹介  
奥宮 貞

京都市新町通り寺ノ内上ル二丁東

阿知和早苗  
右下田鶴子氏紹介

北海道札幌高等女學校  
北海道札幌高等女學校

北海道札幌私立育成尋常小學校附屬幼稚園

札幌南一條西九丁目四番地

札幌北四條東一丁目三番地

札幌南五條西六丁目十二番地

札幌北三條東四丁目御料地第四號

札幌女子高等小學校

札幌女子高等小學校

札幌北二條東二丁目一番地

臺灣台北城內東門街官舎丙二ノ一

臺灣台北城內東門街官舎丙六號十室

右龍澤みち子氏紹介

今井ちよ

青山こゝ

右東くめ子氏紹介

河野きよ

右小柳ゆき子氏紹介

轉居ノ部

岡山縣備中國笠岡女學校へ

横濱市青木町三八七へ

岡 康子  
小曾根よし

山梨縣師範學校女部へ

岡山縣師範學校へ

堺市高等女學校へ

長崎縣高等女學校へ

大分縣高等女學校へ

茨城縣高等女學校へ

長野縣松本高等女學校へ

秋田縣師範學校へ

高知縣師範學校へ

會費領収

自二月二十四日  
至三月二十五日

一金二十錢	自三十五年十一月
一金二十圓	自三十五年十二月
一金二十錢	自三十六年一月
一金二十錢	自三十六年二月
一金二十錢	自三十六年三月
一金二十錢	自三十六年四月
一金二十錢	自三十六年五月
一金二十錢	自三十六年六月
一金二十錢	自三十六年七月
一金二十錢	自三十六年八月
一金二十圓	自三十六年九月
一金二十圓	自三十六年十月
一金二十圓	自三十六年十一月
一金二十圓	自三十六年十二月

新澤ふみ  
小林ふじ  
佐藤せん  
平野みよ  
芳賀きぬ  
大森くに  
大岩のお  
石橋つれよ  
小柳ゆき

鳥居鯨三郎  
安井てつ  
立石直太郎  
大津まん  
山本定野  
波佐谷みえ  
菊池數世  
喜多見さき  
村田よね  
勝田のぶ

號四第卷參第もど子と人婦

一金五 十錢	一金一 圓十錢	一金六 十錢	一金二 十錢	一金五 十錢	一金二 十錢	一金一 圓二十錢	一金一 圓	一金八 十錢	一金七 十錢	一金五 十錢	一金五 十錢	一金一 圓五十錢	一金一 圓	一金一 圓	一金三 十錢	一金五 十錢	一金五 十錢	一金二 十錢
至三 十六 年五 月	至三 十六 年五 月	至三 十六 年五 月	至三 十六 年五 月	至三 十六 年五 月	至三 十六 年五 月	至三 十六 年五 月	至三 十六 年五 月	至三 十六 年五 月	至三 十六 年五 月	至三 十六 年五 月	至三 十六 年五 月	至三 十六 年五 月	至三 十六 年五 月	至三 十六 年五 月	至三 十六 年五 月	至三 十六 年五 月	至三 十六 年五 月	至三 十六 年五 月
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月

淺野てふ	佐藤つや	岡田折枝	甲斐はな	吉田はる	松岡久壽彌	戸野みち	市原すみ	中澤よし	小幡眞佐	岡橋康	杉本園春	小川小春	八坂さだ	藤澤周	柴田つか	村川愛	外山茂	岡澤やへ
一金十 錢	一金十 錢	一金十 錢	一金十 錢	一金十 錢	一金十 錢	一金十 錢	一金十 錢	一金十 錢	一金十 錢	一金一 圓十錢	一金一 圓十錢	一金一 圓十錢	一金一 圓十錢	一金一 圓十錢	一金一 圓十錢	一金一 圓十錢	一金一 圓十錢	一金一 圓十錢
至三 十六 年三 月	至三 十六 年三 月	至三 十六 年三 月	至三 十六 年三 月	至三 十六 年三 月	至三 十六 年三 月	至三 十六 年三 月	至三 十六 年三 月	至三 十六 年三 月	至三 十六 年三 月	至三 十六 年三 月	至三 十六 年三 月	至三 十六 年三 月	至三 十六 年三 月	至三 十六 年三 月	至三 十六 年三 月	至三 十六 年三 月	至三 十六 年三 月	至三 十六 年三 月
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月

山田せん	小林ふぢ	奈良あ	芳賀きぬ	石橋常世	大岩のぶ	大森園	高木なみ	田井畝三郎	北野はる	鎌田きく	下條ますみ	本多しま子	山川い	清水よし	古谷くに	竹澤さと	深津しづ	廣重一枝	印東たの	源冬
------	------	-----	------	------	------	-----	------	-------	------	------	-------	-------	-----	------	------	------	------	------	------	----



一金二	至三十六年三月	森山ふさ
一金二	至三十六年四月	赤江よね
一金二	至三十六年三月	田中八重
一金二	至三十六年四月	木村茂枝
一金二	至三十六年三月	高田芳女
一金二	至三十六年四月	和知てる
一金二	至三十六年三月	打越ふじ
一金二	至三十六年四月	橋本ひさし
一金二	至三十六年三月	甲斐なほえ
一金二	至三十六年四月	村越じう
一金二	至三十六年三月	横山つや
一金二	至三十六年四月	椎川たま
一金二	至三十六年三月	小泉ちえ
一金十	三十六年四月	山田はる
一金十	三十六年四月	宮本てる

フレールベル會規則

- 第一條 本會ハ幼児保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハフレールベル會ト稱シ東京ニ置ク
- 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼児保育ニ熱志ナルモノニシテ會員ノ紹介ナシ
- 第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一月ケ月金拾錢ヲ提出スベシ
- 第五條 會員名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ
- 第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ
- 一 總會 毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保育參列品幼兒成績物展覽會、會務ノ報告、幹事ノ選舉等ヲナス會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ
  - 一 常會 毎年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス
  - 一 組合會 會員中特 或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以テ組織ス但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス
  - 一 雜誌發行 毎月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス
  - 一 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
- 一 會長 會務ヲ總理ス
  - 一 幹事 會務ヲ掌理ス
  - 一 評議員 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
- 第八條 會長ハ役員中ヨリ推薦スルモノトス
- 第九條 主幹ハ會長ノ特選トス
- 第十條 幹事ハ會員ノ互選トシ其任期チ二ケ年トス但シ毎年半数ヲ改選スルモノトス
- 第十一條 評議員ハ會長ノ特選トス
- 第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルコトアルベシ
- 第十三條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラザレバ變更スルコトヲ得ス

女子高等師範學校教授 關根正直先生校閲  
 女子高等師範學校講師 友田宜剛先生編纂

# 女子作文教範

全五冊  
和裝美本

虎を狗のやうにも畫かれぬ者に、手本も與へず運筆法も教へずして、汝の繪は繪にならぬといふのは酷である。今の學生は碌々普通文もかけぬといふ聲が、獨男生にのみでなく、女生に殊に多い。是は前の繪の表と同じではあるまいか。之を救はんとして友田先生多年、女子高等師範に於て特に女子の爲めに研究實驗せられた結果、それに斯道の大家關根正直先生の嚴密なる校閲を遂げられたのが即ち此書である。先生が學校にあげた功績を思へば此書の眞價は贅せずしてわかる。どうか斯道の先生方手本に運筆法にも此書を持たせて、あはれ罪ない處女に、前のやうな酷評は免れさせて上げて下さい。

女子高等師範學校教諭 西島富壽先生 共編  
 女子高等師範學校訓導 吉村千鶴先生

## 小學裁縫教程

文部省  
檢定濟

尋常科	尋常科	尋常科	尋常科
兒童教員用	兒童教員用	兒童教員用	兒童教員用
修正改刷	同	同	同
一冊定價九錢郵稅二錢	一冊定價廿八錢郵稅四錢	一冊定價廿五錢郵稅四錢	一冊定價五十錢郵稅八錢

發行所

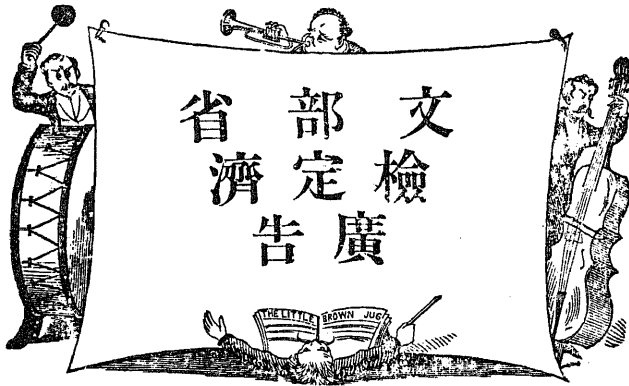
東京神田區駿河臺西紅梅町拾番地  
 電話本局二千九百九十九番

光

融

館

明治三十四年二月廿八日  
 丙午三月三日  
 郵務省許可



文部省 定檢 告廣

發行以來唯一の完全  
 なる唱歌教科書と  
 して非常なる大喝采  
 を博し僅々數月間に  
 三版發行の盛運に會  
 生れたる本書は今回文  
 部省の檢定を経て更  
 らに其眞價を發揮す  
 るに榮を得たり  
 従來の文部省檢定と  
 即ち許可せられたる  
 しのみ許可せられたる  
 のみに許可せられたる  
 ち眞の教科書と  
 て檢定の経たぬもの  
 りは實に本書か如何に  
 り科の授上か最完全  
 なるに足るべし  
 該科の授上か最完全  
 るに足るべし

空前の唱歌良教科書！  
 檢定済生徒用唱歌教科書の嚆矢  
 文部省檢定済  
**唱歌教科書**  
 郵税一冊に就き金四錢

教師用	第一卷定價金三十錢
第二卷定價金三十錢	
第三卷定價金三十錢	
第四卷定價金三十錢	
生徒用	第一卷定價金十五錢
第二卷定價金十五錢	
第三卷定價金十五錢	
第四卷定價金十五錢	

- **洋琴** 金參百圓以上 各種
- **ヴァイオリン** 金五圓以上五拾圓迄 各種
- **鈴木製 鈴來品** 八圓以上百五拾圓迄 各種
- **樂隊用樂器** 大太鼓金貳拾圓以上小太鼓八圓半以上シンバル金四圓以上其他バス、バリトン、テナリ、アルト、ホルネット、トロンボン等金貳拾圓以上百六拾圓迄
- **鼓隊用樂器** 太鼓金貳拾圓以上 橫笛金壹圓以上 ○學校用一組拾參圓
- **手風琴** 金貳圓五拾錢以上 參拾圓迄 各種
- **附保險 山葉風琴** 定價金拾六圓五拾錢 以上金貳百圓迄
- 右の外兩用風琴、吹奏琴、ハイモニカ、フラジレット其他各樂器並に和洋音樂附屬品各種
- **ピアノ、調律修繕**
- **オルガン**
- **郵券貳錢 附目錄進呈**